

DEJIL

FART
MONY

January 2025
NHK Symphony Orchestra, Tokyo

終演時のカーテンコールを 撮影していただけます

スマートフォンやコンパクトデジタルカメラなどで撮影していただけます。
SNSでシェアする際には、ハッシュタグ「#N響」【#nhkso】の追加をぜひお願いいたします。
ほかのお客様の映り込みにはご注意ください。

※撮影はご自身からとし、手を高く上げる、望遠レンズや三脚を使用するなど、
周囲のお客様の迷惑となるような行為はお控えください

You are free to take stage photos
during the curtain calls at the end of the performance.

You can take photos with your smartphone or compact digital camera.
When you share the photos on social media, please add #nhkso.
Be careful to avoid accidentally including any audience members in your photos.



「フラッシュ」オフ 設定確認のお願い

撮影前に、スマートフォンのフラッシュ設定が「オフ」になっているか確認をお願いいたします。

Set your device to “flash off mode.”

Make sure that your smartphone is on
“flash off mode” before taking photos.



スマートフォンのフラッシュをオフにする方法 | 多くの機種では、カメラ撮影の画面の四隅のどこかに、フラッシュの状態を示す⚡(カメラマーク)を含むアイコンが表示されています。これをタップすることで、「オン(強制発光)」「自動(オート)」「オフ」に変更できます。

インターネット アンケートに ご協力ください

N響では、今後のよりよい公演の実現に向けて、インターネットでアンケートを行っています。ご鑑賞いただいた公演のご感想や、N響の活動に対するみなさまのご意見を、ぜひお寄せください。ご協力をお願いいたします。

詳しくは44ページをご覧ください



こちらのQRコードから
アンケートページへ
アクセスできます

<https://www.nhkso.or.jp/enquete.html>

お客様へのお願い

Please kindly keep in mind the following:



公演中は携帯電話、
時計のアラーム等は必ずお切りください
Be sure to set your phone to silent mode and turn off your watch alarm etc. during the performance.



私語、パンフレットをめくる音など、
物音が出ないように配慮ください
Please refrain from making any noise, such as engaging in private conversations or turning booklet pages.



大きく手足を揺らしたり体を乗り出したりするなど
他のお客様にご迷惑となる行為はおやめください
Do not disturb others by overly swaying your body.



発熱等の体調不良時には
ご来場をお控えください
Please refrain from visiting the concert hall if you have a fever or feel unwell.



演奏は最後の余韻まで
お楽しみください
Please wait until the performance has completed before clapping hands or shouting “Bravo.”



演奏中の入退場は
ご遠慮ください
Please refrain from entering or leaving your seat during the performance.



適切な手指の消毒、
咳エチケットにご協力ください
Your proper hand disinfection and cough etiquette are highly appreciated.



場内での録音、録音、写真撮影は固くお断りいたします
(終演時のカーテンコールをのぞく)
Video or audio recordings, and still photography at the auditorium are strictly prohibited during the performance.
(Except at the time of the curtain calls at the end of the concert.)



補聴器が正しく装着されているか
ご確認ください
Please make sure
that your hearing aids are properly fitted.



「ブラボー」等のお声掛けをされる際は、
周囲の方へのご配慮にご協力をお願いいたします
When shouting “Bravo,”
please be considerate of people around you.

PHILHARMONY

CONTENTS

JANUARY 2025

1

- 4 [公演プログラム] **Aプログラム**
- 9 [公演プログラム] **Bプログラム**
- 15 [公演プログラム] **Cプログラム**
- 20 [シリーズ] **N響百年史** | 第52回 | **ワインガルトナー、来たる!** 片山杜秀
- 2 NHK交響楽団メンバー
- 24 2025年2月定期公演のプログラムについて——公演企画担当者から
- 26 チケットのご案内
- 27 2024–25定期公演プログラム
- 29 2025–26定期公演プログラム
- 32 特別公演／各地の公演／海外公演
- 38 曲目解説執筆者／N響の出演番組
- 39 Information (篠崎史紀 特別コンサートマスター退任のお知らせ／新入団／指揮研究員の交代について／訃報)／お詫びと訂正
- 40 特別支援・特別協力・賛助会員
- 44 みなさまの声をお聞かせください!
- 45 NHK SYMPHONY ORCHESTRA, TOKYO Members

Artist Profiles & Program Notes

- 46 Program A
- 49 Program B
- 53 Program C
- 56 The Subscription Concerts Program 2024–25
- 58 N響関連のお知らせ
- 59 N響の社会貢献
- 60 役員等・団友

NHK交響楽団

首席指揮者:ファビオ・ルイーヂ

名誉音楽監督:シャルル・デュトワ

桂冠名誉指揮者:ヘルベルト・ブロムシュテット

桂冠指揮者:ウラディーミル・アシュケナージ

名誉指揮者:バーヴェ・ヤルヴィ

正指揮者:尾高忠明、下野竜也

特別コンサートマスター:篠崎史紀

第1コンサートマスター:郷古 廉

ゲスト・コンサートマスター:川崎洋介

第1ヴァイオリン

- 青木 調
- 飯塚歩夢
- 宇根京子
- 大鹿由希
- 倉富亮太
- 後藤 康
- 小林玉紀
- 高井敏弘
- 東條大河
- 猶井悠樹
- 中村弓子
- 降旗貴雄
- 松田拓之
- 三又治彦
- 宮川奈々
- 山岸 努
- 横溝耕一

第2ヴァイオリン

- ◎大宮臨太郎
- ◎森田昌弘
- 木全利行
- 齋藤麻衣子
- 嶋田慶子
- 白井 篤
- 田中晶子
- 坪井きらら
- 丹羽洋輔
- 平野一彦
- 船木陽子
- 俣野賢仁
- 村尾隆人
- 矢津将也
- 山田慶一
- 横島礼理

横山俊朗
米田有花

* 湯原佑衣

ヴィオラ

- ◎佐々木 亮
- ◎村上淳一郎
- ☆中村翔太郎
- 小野 聡
- 小島茂隆
- * 粟林衣李
- 坂口弦太郎
- 谷口真弓
- 飛澤浩人
- 中村洋乃理
- 松井直之
- 三国レイチェル由依
- # 御法川雄矢
- 村松 龍

チェロ

- ◎辻本 玲
- ◎藤森亮一
- 市 寛也
- 小島幸法
- 中 実徳
- 西山健一
- 藤村俊介
- 藤森洗一
- 宮坂拓志
- 村井 将
- 穴部優典
- 山内俊輔
- 渡邊方子

コントラバス

- ◎吉田 秀
- 市川雅典
- 稲川永示
- 岡本 潤
- 今野 京
- 西山真二
- 本間達朗
- 矢内陽子

フルート

- ◎甲斐雅之
- ◎神田寛明
- 梶川真歩
- # 中村淳二

オーボエ

- ◎吉村結実
- 池田昭子
- 坪池泉美
- 和久井 仁

クラリネット

- ◎伊藤 圭
- ◎松本健司
- 山根孝司

ファゴット

- ◎宇賀神広宣
- ◎水谷上総
- * 大内秀介
- 佐藤由起
- 森田 格

ホルン

- ◎今井仁志
- 石山直城
- 勝俣 泰
- 木川博史
- 庄司雄大
- 野見山和子

トランペット

- ◎菊本和昭
- ◎長谷川智之
- 安藤友樹
- * 藤井虹太郎
- 山本英司

トロンボーン

- ◎古賀 光
- ◎新田幹男
- 池上 亘
- 黒金寛行
- 吉川武典

テューバ

- 池田幸広

ティンパニ

- ◎植松 透
- ◎久保昌一

打楽器

- 石川達也
- 黒田英実
- 竹島悟史

ハーブ

- 早川りさこ

ステージ・マネージャー

- 徳永匡哉

ライブラリアン

- 沖 あかね
- 木村英代

(五十音順、◎首席、☆首席代行、○次席、□次席代行、#インスペクター、*契約)

こちらのQRコードから
楽員の詳しいプロフィールが
ご覧いただけます。



<https://www.nhkso.or.jp/about/member/index.html>

Special Thanks



NHK SYMPHONY ORCHESTRA T O K Y O

特別支援

With Special Support of

岩谷産業株式会社

Iwatani Corporation

 三菱地所株式会社

Mitsubishi Estate Co., Ltd.

 みずほ銀行

Mizuho Bank, Ltd.

公益財団法人 渋谷育英会

Shibuya Scholarship Foundation

東日本旅客鉄道株式会社

East Japan Railway Company

 NTT 東日本

Nippon Telegraph and Telephone East Corporation

東京海上ホールディングス株式会社

Tokio Marine Holdings, Inc.

株式会社 ポケモン

The Pokémon Company

PROGRAM

A

第2028回

NHKホール

1/18 土 6:00pm

1/19 日 2:00pm

指揮

トウガン・ソヒエフ

コンサートマスター

郷古 廉

ショスタコーヴィチ没後50年

ショスタコーヴィチ

交響曲 第7番 ハ長調 作品60

「レニングラード」[73']

I アレグレット

II モデラート(ポコ・アレグレット)

III アダージョ

IV アレグロ・ノン・トロツポ

※この公演に休憩はございません。あらかじめご了承ください。

※演奏時間は目安です。

インターネットアンケートにご協力ください

N響では、今後のよりよい公演の実現に向けて、インターネットでアンケートを行っています。みなさまの貴重なご意見を参考にさせていただきたく、ぜひお声をお寄せください。ご協力お願いいたします。

詳しくは44ページをご覧ください



こちらのQRコードから
アンケートページへアクセスできます



<https://www.nhkso.or.jp/enquete.html>

トウガン・ソヒエフ (指揮)



2025年もトウガン・ソヒエフとともに、N響の新しい年が始まる。2008年を皮切りに客演を重ね、近年は格段に緊密な信頼関係のもと多彩な音楽冒険をくり広げている。2022年春にボリショイ劇場とトゥールーズ・キャピトル管弦楽団の音楽監督をともに辞任した彼が、N響の指揮台に3年ぶりに立ったのが2023年1月。翌年1月にもフランス、ロシア、ドイツの3様のプログラムを鮮明に実らせた。

ソヒエフはいま40代、コンサートにオペラに精力的な活躍を続けている。1977年にソヴィエト連邦下のウラジカフカスに生まれ、サンクトペテルブルク音楽院でイリヤ・ムーシン、ユーリ・テミルカーノフに指揮を学んだ。ロシア音楽でのパッションやダイナミズム、フランス音楽に顕著な洗練や色彩だけでなく、2010年代にベルリン・ドイツ交響楽団の首席指揮者も務めたように、独逸音楽の綿密な構築にも腕を揮う。2023年11月にはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、2024年11月にはミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団とも来日した。

今シーズンもひき続き3つのプログラムを指揮。これまでN響と練り上げてきた作曲家を主として、ムソルグスキーとストラヴィンスキーでは初共演。ロシアや東欧出身の作曲家に重点を置くとともに、コロナ禍で叶わなかったブラームスの《交響曲第1番》にいよいよ臨む。熱く雄渾な年明けが期待される。

[青澤隆明／音楽評論家]

Program Note | 千葉 潤

ウクライナ侵攻の直後に起きたロシア音楽(家)の排斥運動に抗議して、ロシアとフランスでの要職を辞したトウガン・ソヒエフ。当時彼が発した感動的な声明文の一部を紹介しておきたい。「私たち音楽家は、偉大な作曲家の音楽を演奏し解釈することによって、人類がお互いに思いやりと尊敬の念を持ち続けるための特別な機会と使命を与えられているのです。私たち音楽家は、ショスタコーヴィチの音楽を通して戦争の悲惨さを人々に思い起させるために存在しているのです」。

まさに今日、《第7番》の壮大な響きのなかに、時代と国境を越えて人類に向けられた普遍的なメッセージを聴いていただきたい。

交響曲 第7番 ハ長調 作品60「レニングラード」

第2次世界大戦の独ソ戦の中で、旧レニングラード攻防戦は最大の激戦といわれる。1941年6月、ソ連への軍事進攻を開始したナチス・ドイツは、9月にはレニングラードを完全に包囲した。約900日後の1944年1月に解放されるまでに、全市で64万人の餓死者を含む80万人の犠牲者が出たといわれる。

当時30代半ばのドミートリ・シヨスタコーヴィチ(1906~1975)は、ドイツ軍の空爆から音楽院を守る消防任務をこなしながら、7月に新しい交響曲に着手し、爆撃が激化した9月末には第3楽章のスコア清書を終えた。戦況は悪化し10月初めには家族と共に空路モスクワに疎開するも、さらにヨーロッパ・ロシアの南東部のクイビシェフ(現サマラ)への避難を余儀なくされる。肝心のフィナーレを前に作曲の筆は滞ったが、ようやく12月27日に完成され、生まれ故郷であるレニングラードに捧げられた。

異常な状況下で作曲・初演された交響曲に相応しく、その演奏史も特別である。1942年8月9日、封鎖下のレニングラードでの演奏は、極限状態に置かれた市民に生きる勇気と尊厳を思い起こさせた。スコアのマイクロフィルムは中近東と南米を経由してニューヨークへ空輸され、アメリカ初演を巡る争奪戦を制したトスカニーニとNBC交響楽団により1942年7月19日にラジオ中継された。当時のタイム誌は、“消防士シヨスタコーヴィチ——レニングラード爆撃の最中に勝利の和音を聞く”のキャプションと共に、防災ヘルメットを付けた彼の肖像画を表紙に掲げた。この交響曲とその作曲者は、いまや全世界的な反ファシズム闘争の象徴になっていた。

とはいえ、この作品が皆に歓迎されたわけではない。ストラヴィンスキーやバルトーク等の前衛音楽家にとって、戦争と勝利を描く表現手法はあまりにも大言壮語であり、既存の音楽の“二番煎じ”に聞こえた(バルトークが《管弦楽のための協奏曲》で本作を揶揄したことは有名)。案の定、前衛主義が隆盛した冷戦時代にこの作品の評価は急落したが、それでも人々の心には戦争や暴力に対する英雄的な闘いの象徴として記憶されつづき、近年の世界情勢を受けてその真価が見直されている。

この曲の完成直後、シヨスタコーヴィチはある友人にこう語っていた。「〔《第7番》の意味は)もちろん、ファシズムさ。でも真の音楽は、決してある主題に文字通りに結び付けられることは出来ない。国家社会主義は唯一のファシズムの形態ではない。この音楽はあらゆる形のテロル、隷属、精神の束縛について語っているんだ。その言葉通り、今や《第7番》は私たち自身の時代を映し出している。その強烈なメッセージは、当時も今も芸術音楽の枠を超えて人々の心を揺さぶる力を持っている。

第1楽章 アレグレット、ハ長調、4分の4拍子。変則的なソナタ形式であり、展開部の代わりに、いわゆる“侵略の主題”をグロテスクに変奏する中間部が置かれる(これがラ

ヴェルの《ボレロ》を連想させることは作曲者も自覚の上だった)。その巨大なクレッシェンドが導き出すのは、壮絶なレクイエムとしての再現部である。

第2楽章 モデラート(ポーコ・アレグレット)、ロ短調、4分の4拍子、複合3部形式。作曲者が“回想”と名付けたスケルツォ楽章であり、中間部では甲高い木管による8分の3拍子の辛辣な旋律と金管による行進曲が気まぐれに交替する。

第3楽章 アダージョ、ニ長調、4分の3拍子。全曲の白眉というべき緩徐楽章であり、主部はストラヴィンスキー《詩篇交響曲》第3楽章に似たコラルとバッハ《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ》を様式化した主題が、素朴な“歌”と交替する。唐突に始まる中間部は、^{むち}鞭打たれながら行進するような激しい音楽で、戦争の痛みを今一度喚起する。アタッカで途切れずに次の楽章に続く。

第4楽章 アレグロ・ノン・トロポ、ハ長調、2分の2拍子。冒頭で奏される2つの主題が、途中にサラバンド風のエピソードを挟みながら多彩に展開され、最後はバンドも加わって壮大な第1楽章第1主題の循環を導き出す。

作曲年代	1941年7月19日から12月27日
初演	1942年3月5日、サムイル・サモスド指揮、ポリショイ劇場管弦楽団、クイビシェフにて
楽器編成	フルート3(ピッコロ1、アルト・フルート1)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット3(E♭クラリネット1)、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、小太鼓3、トライアングル、タンブリン、銅鑼、シロフォン、ピアノ1、ハープ2、弦楽 バンド(舞台上):トランペット3、ホルン4、トロンボーン3

A

2025

JANUARY

[第2028回]



戦争の愚かしさと悲惨さに向き合う

ドミートリ・ ショスタコーヴィチ

Dmitry Shostakovich (1906–1975)

20世紀を代表するソビエト連邦の作曲家。検閲や言論統制のある政治体制のもと、自分の信念と体制の意向との板ばさみのなかで作品を書いた。苦悩や風刺精神、暗いユーモアに、ヒューマニズムが滲む作風は、20世紀という時代やソビエト連邦の体制を色濃く反映している。戦争や侵攻で命が踏みにじられるのを目の前にし、戦火のなかで書き進められた《交響曲第7番「レニングラード」》は、いま私たちに何を語りかけるのか。

レニングラード攻防戦

第2次世界大戦の独ソ戦で激戦となった都市攻防戦。ヒトラー率いるナチス・ドイツ軍がソ連第2の都市レニングラードを完全に包囲し、市民約300万人を巻き込んだ戦いは苛烈を極めた。封鎖されたレニングラードでは多くの人が飢えて命を落とす凄惨な状況となり、寒波や病気も重なって1日に2万人もの死者を数えたこともあるという。



防火ヘルメットをかぶり
消防任務につくショスタコーヴィチ
イラストレーション: ©IKE

B

第2030回

サントリーホール

1/30 木 7:00pm

1/31 金 7:00pm

指揮 トウガン・ソヒエフ | プロフィールはp. 5

ヴァイオリン 郷古 廉

コンサートマスター 長原幸太

◆長原幸太: 広島出身。5歳よりヴァイオリンをはじめ、12歳で東京交響楽団と共演、東京藝術大学入学ののちジュリアード音楽院へ留学。小澤征爾はじめ多くの名指揮者と共演。東京・春・音楽祭では毎年ムーティと共演し、信頼を得ている。ソリスト、室内楽奏者として国内外で活躍するほか、2014年から2024年まで読売日本交響楽団コンサートマスターを務めた。

ムソルグスキー(リャードフ編)

歌劇「ソロチンツィの市」

—「序曲」「ゴパック」[8']

バルトーク

ヴァイオリン協奏曲 第2番 [35']

- I アレグロ・ノン・トロppo
- II アンダンテ・トランクイロ
- III アレグロ・モルト

—休憩(20分)—

ドヴォルザーク

交響曲 第8番 ト長調 作品88 [34']

- I アレグロ・コン・プリオ
- II アダージョ
- III アレグレット・グラチオーソ
—モルト・ヴィヴァーチェ
- IV アレグロ・マ・ノン・トロppo

※演奏時間は目安です。

インターネットアンケートにご協力ください

N響では、今後のよりよい公演の実現に向けて、インターネットでアンケートを行っています。みなさまの貴重なご意見を参考にさせていただきます。ぜひお声をお寄せください。ご協力お願いいたします。

詳しくは44ページをご覧ください



こちらのQRコードから
アンケートページへアクセスできます



<https://www.nhkso.or.jp/enquete.html>

郷古 廉(ヴァイオリン)



2013年ティボール・ヴァルガ国際ヴァイオリン・コンクール優勝ならびに聴衆賞・現代曲賞を受賞。現在、国内外で最も注目されている若手ヴァイオリニストのひとりである。

1993年生まれ。宮城県多賀城市出身。2006年第11回ユーディ・メニューイン青少年国際ヴァイオリンコンクールジュニア部門第1位(史上最年少優勝)。2007年12月のデビュー以来、各地のオーケストラと共演。

共演指揮者にはゲルハルト・ボッセ、フランソワ・グザヴィエ・ロト、秋山和慶、井上道義、下野竜也、山田和樹、川瀬賢太郎などがいる。2017年より3年かけてベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ全曲を演奏するシリーズにも取り組んだ。使用楽器は1682年製アントニオ・ストラディヴァリ「Banat」。個人の所有者の厚意により貸与される。2019年第29回出光音楽賞受賞。

NHK交響楽団ゲスト・コンサートマスターを経て、2024年4月にNHK交響楽団第1コンサートマスターに就任。ソリストとしてもたびたびN響に登場しており、2024年1月定期公演ではソヒエフの指揮のもと、モーツァルト《ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲》のヴァイオリン・ソロを務めた。

Program Notes | 太田峰夫

どんな仕事でもキャリアの後半にさしかかると、新しいことにチャレンジするのが少し億劫になってくるものだ。ところがいざやってみると、新しい出会いがあったり、自分でも気づかなかった自身の可能性に気づいたり、よい結果につながることもある。本日演奏される3作品はいずれもそれぞれの作曲家にとってキャリアの新しい1ページを開いたものばかり。「その人らしさ」がどんな風に音になっているかに注目しながら聞けば、きっと大いに楽しめるだろう。

ムソルグスキー(リャードフ編)

歌劇「ソロチンツィの市」―「序曲」「ゴパック」

ソロチンツィは文豪ニコライ・ゴーゴリの生まれ故郷(現ウクライナ領ヴェルーイキ・ソローチンツィ)である。「ソロチンツィの市」は彼のデビュー作『ディカーニカ近郷夜話』(1831~1832)所収の中篇小説で、若い男女の恋を中心に、ウクライナの風俗をロシア語でいきいきと描いている。

この物語をもとに歌劇を書く計画をモデスト・ムソルグスキー(1839~1881)が立てたのは1874年夏のことだ。1月に初演された歌劇《ボリス・ゴドノフ》が好評だったことに気をよくしたのか、この年の彼はピアノ曲《展覧会の絵》など、重要な作品を立て続けに書き

ている。オペラの領域でも大作《ホヴァンシチナ》にとりかかっているが、重厚な歴史ものにかかりきりになるのを嫌い、陽気な内容のオペラも並行して作ることにした。そこで題材に選んだのが、かねてから敬愛していたゴゴリの作品だったわけである。

作曲家の早すぎる死によってオペラは未完に終わったが、〈序曲〉と〈ゴバック〉は今日、アナトーリ・リャードフ(1855～1914)が管弦楽化したバージョンで聴くことができる。〈序曲〉はオペラ冒頭に演奏される民謡風の音楽で、3部形式からなる。〈ゴバック〉は2拍子のウクライナ舞曲だ。これを第3幕終曲として使うつもりだったのか、第1幕終曲として使うつもりだったのか、真相ははっきりしないが、少なくとも舞曲の出来に作曲家が満足していたことは、彼がこの曲のピアノ編曲を1880年に出版している事実からもうかがえよう。

作曲年代	1874年8月～1881年(未完)。リャードフによる管弦楽化は1881～1903年
初演	1913年10月21日(ロシア旧暦8日)、モスクワ自由劇場、コンスタンティン・サラージェフ指揮モスクワ自由劇場による(A. リャードフ、V. カラトウイギン、N. リムスキー・コルサコフ、J. サハノフスキイの補作)
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、トライアングル、タンブリン、弦楽

バルトーク

ヴァイオリン協奏曲 第2番

「第3楽章はうまくいったと思う。これは実質上、第1楽章の自由な変奏だ(つまり君の上を行ったというわけだ、変奏曲を書いたのだから)。非常に輝かしく効果的で、新しい事柄も含まれている」。

1938年9月、ヴァイオリニストのゾルターン・セーケイにあてた手紙の中で、ベーラ・バルトーク(1881～1945)は新作《ヴァイオリン協奏曲第2番》第3楽章について上のように述べている。彼の場合、ハンガリー語の親称「君(te)」で呼び合える音楽家仲間には限られていた。該当するのは作曲家のエルネー(エルンスト・フォン)・ドホナーニとゾルターン・コダーイ、指揮者のフリッツ・ライナー、ヴァイオリニストのヨーゼフ・シゲティ、それにセーケイくらい。20歳以上の年齢の差にもかかわらず、作曲家の信頼を勝ち得ていた点で、セーケイは数多いハンガリーの名演奏家のうちでもかなり例外的な存在だったと言えることができる。

そんな彼がバルトークに協奏曲の作曲を依頼したのは1936年8月のことだった。翌年1月に会った際、作曲家は単一楽章の「変奏曲」を書くアイデアを提示したが、ヴァイオリニストは伝統的な3楽章形式にこだわった。先の引用でバルトークが「君の上を行った」と書いているのは、まさにこのやりとりをふまえたものだ。実際、本作では両端楽章の照応関係に加え、第2楽章において変奏曲形式が用いられているのを確認できるだろう。バルトークなりの「古典回帰」の姿勢がうかがえる協奏曲の傑作である。

第1楽章はソナタ形式。冒頭主題はハンガリーの民俗舞曲「ヴェルブンコシュ」をふま

えている。副次主題はシェーンベルクらの十二音技法を意識したものでしょう。

第2楽章では自作主題をもとに6つの変奏が展開する。最後は主題の回想とともに、静かに終わる。

第3楽章は第1楽章の自由な変奏。エンディングには2つのバージョンがあるが、セーケイの希望でつくられた第2バージョン(今日一般に使用されるもの)では、独奏と管弦楽の協演で華やかに曲が閉じられる。

作曲年代	1937年8月～1936年12月31日作曲、1939年2月25日～3月3日改訂
初演	1939年3月23日、アムステルダム・コンサートヘボウにてゾルターン・セーケイの独奏、ウィレム・メンゲルベルク指揮アムステルダム・コンサートヘボウ管弦楽団による
楽器編成	フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット2(バス・クラリネット1)、ファゴット2(コントラファゴット1)、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、小太鼓、小太鼓(響線なし)、トライアングル、銅鑼、チェレスタ1、ハープ1、弦楽、ヴァイオリン・ソロ

ドヴォルザーク

交響曲 第8番 ト長調 作品88

「断片的で、副次的なものがじつにたくさん動き回っている。どれも上質で、音楽的に面白く、美しい。ただ、主要なものはない!」

アントニン・ドヴォルザーク(1841～1904)の《交響曲第8番》をはじめ聴いたときのブラームスの反応である。このハンブルク生まれの巨匠がドヴォルザークの才能を高く評価していたことはよく知られているが、厳格な構成美をもとめる彼の基準からすると、本作はどこかとりとめがない音楽のように聞こえたのだ。

じつのところ、まさにそのとりとめのなさにおいて、本作はドヴォルザークの新境地を示すものだった。主題を加工し、練り上げることに重きを置くドイツ語圏の考え方のちょうど逆をいくように、彼はここで新しい旋律をつぎつぎと繰り出し、いどり豊かなパノラマを構築している。第1楽章を例にとれば、彼は展開部で用いた旋律を再現部ではほとんどふれずにすませており、全体としてややメドレー的ながらも、コンパクトな楽曲にまとめている。まさにそうした新しさが、伝統主義者ブラームスを戸惑わせたのだろう。ドイツ語圏の交響曲の伝統を強く意識してきたドヴォルザークが、あえて独自の方向性を示した点で、本作は彼のキャリアの中でも際立って重要な位置を占めるものと言うことができる。

初演は1890年2月2日にプラハで行われたが、興味深いのは、それから3か月もたない同年4月24日に、国外での初演がロンドンで行なわれている点である。イギリスでのドヴォルザークの人気はかねてから高かったが、とりわけ本作はその独自性も手伝って、当初から好まれたようだ。楽譜が従来のようにベルリンのジムロック社からではなく、ロンドンのノヴェロ社から出版されているのも、こうした事態を反映してのものだったと考えら

れる。

第1楽章はソナタ形式。提示部は5つの主題を持つ。冒頭主題は主要主題群のひとつをなしており、展開部や再現部のはじめで効果的に用いられる。

第2楽章は緩徐楽章である。厳かな祈りの音楽(A)と、民俗的な奏楽(B)が交互に展開していき(ABA'B')、最後はAの回想とともに終わる。

第3楽章は3部形式のワルツ楽章。中間部の主題はおそらくドヴォルザーク自身の1幕オペラ《頑固者たち》のアリア〈女は若く、男は年寄り〉からとられている。

第4楽章は3部形式の変奏曲。変奏主題は第1楽章主要主題と関連するものだろう。中間部では短調の副次主題が展開するが、やがてファンファーレを経て、主部が戻ってくる。

作曲年代	1889年8月26日～1889年11月8日
初演	1890年2月2日ブラハ・ルドルフィヌムにてアントニン・ドヴォルザーク指揮ブラハ国民劇場管弦楽団による
楽器編成	フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、弦楽

「帰りのチャイム」として日本でもすっかりお馴染み、〈遠き山に日は落ちて〉の原曲である《新世界交響曲》の作曲家。チェコの田舎で生まれ育ち、ブラームスにその才を見出されて《スラヴ舞曲集》で作曲家として成功をおさめたのは30代後半になってから。郷愁を誘うようなのびやかな美しいメロディを多く生み出した。家庭生活と故郷の自然を愛し、正直で朴訥なクラシック界屈指の癒しキャラ。

B
2025
JANUARY
[第2030回]
🎵🎵

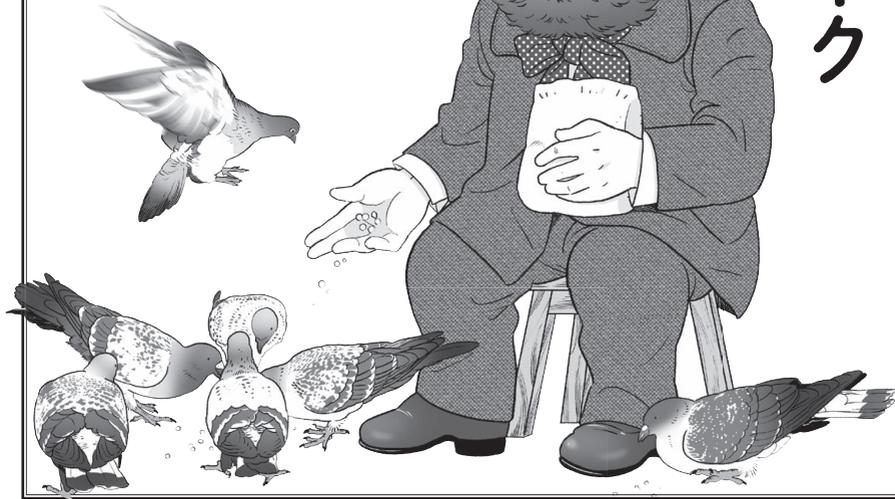
Antonín Dvořák (1841–1904)

次から次へと紡がれる、なつかしく美しいメロディ アントニン・ドヴォルザーク

趣味で鳩を飼う

作曲家としての収入が安定すると、ドヴォルザークは小さな村・ヴィソカーにあった古い羊飼いの小屋を改装して夏の別荘とした。村でのスローライフを満喫しながら、この地で鳩を飼うことが大きな楽しみになったという。演奏旅行でイギリスを訪れた際には、ドヴォルザークの趣味を知ったイギリス王室からイギリスの鳩が贈られた。

ヴィソカーの別荘で鳩にエサをやるドヴォさん
《交響曲第8番》もこの別荘で（鳩と一緒に）作ったヨ！
イラストレーション：©IKE



C

第2029回

NHKホール

1/24 金 7:00pm1/25 土 2:00pm

指揮

トウガン・ソヒエフ | プロフィールは p. 5

コンサートマスター

篠崎史紀

※本公演は篠崎史紀が「特別コンサートマスター」退任前の最後の定期公演となります。詳細は p. 39 をご参照ください。

ストラヴィンスキー

組曲「プルチネッタ」[24']

- I 序曲
- II セレナード
- III a) スケルチーノー b) アレグロ—
c) アンダンティーノ
- IV タランテラ
- V トッカータ
- VI ガヴォット
- VII ヴィーヴォ
- VIII a) メヌエット— b) 終曲

— 休憩 (20分) —

ブラームス

交響曲 第1番 ハ短調 作品68 [45']

- I ウン・ボーコ・ソステヌート—アレグロ
- II アンダンテ・ソステヌート
- III ウン・ボーコ・アレグレット・エ・グラチオーソ
- IV アダージョ—アレグロ・ノン・トロポ、
マ・コン・プリオ

※ 演奏時間は目安です。

インターネットアンケートにご協力ください

N響では、今後のよりよい公演の実現に向けて、インターネットでアンケートを行っています。みなさまの貴重なご意見を参考にさせていただきたく、ぜひお声をお寄せください。ご協力お願いいたします。

詳しくは44ページをご覧ください



こちらのQRコードから
アンケートページへアクセスできます



<https://www.nhkso.or.jp/enquete.html>

過去を学び、現在に生かす。ごく当たり前のようだが、そんな作曲の仕方を最初に試みた人物が19世紀後半に生きたブラームスである。彼はほとんど学者といってもよい手つきでバッハから古典派にいたる作品を徹底的に勉強し、それらの作品の出版にも力を尽くした。一方、20世紀に生きたストラヴィンスキーにとって、「過去」は単なるパッチワークの素材に他ならない。本日のプログラムで注目されるのは、こうした二種の過去への姿勢ということになる。

ストラヴィンスキー

組曲「プルチネッタ」

やや乱暴な言い方になるが、この《プルチネッタ》はニセの素材を基にした、ニセの18世紀音楽である。こうした方法論を扱う手管にかけて、イーゴリ・ストラヴィンスキー(1882~1971)の右にでるものはいない。

1918年、ロシア・バレエ団を率いる興行師ディアギレフは、ドメニコ・スカラッチェの音楽を用いたバレエが思わぬ成功をおさめたことから、今度はジョヴァンニ・バッティスタ・ペルゴレージ(1710~1736)の作品を蘇^{よみがえ}らせることを思いつく。彼は持ち前の行動力でナポリの音楽院と大英博物館から楽譜を探し出すと、さっそくストラヴィンスキーに編曲を持ちかけた。その「民衆的、スペイン的で異国風」の音楽に心を惹かれたストラヴィンスキーは、——舞台装置をピカソ、振り付けをマシーンが担当することもあってか——快く依頼を引き受けたのだった。

ただし、ペルゴレージに「プルチネッタ」という作品があるわけではなく、全体はディアギレフが探してきた小曲を、勝手につなげたものである。編曲に際しては、時としてかなり斬新な和声が付されていたり、ストラヴィンスキーによる創作部分が含まれていたりするのだが、原曲の主旋律と低音はほぼそのまま生かされている。ゆえにちょっと聴くとバロック音楽のようでありながら、注意してみると「じわじわ」と妙なところが浮かびあがってくるという仕掛け。ニセの18世紀音楽なのだ。

1920年にバレエ曲が完成したあと、1922年に彼は全体を管弦楽組曲に仕立て直し、アメリカに渡ったのちの1947年、おもに著作権料を得るために再度細かい修正を行った。

さて、さらに面白いのは、初演の時点ではペルゴレージ作と信じられていた原曲の大部分が、その後、他の作曲家(ほぼ同時代のイタリアの作曲家)のものであることが判明した点だ。なにしろ、もっとも有名な第1曲からして、実はガッロという作曲家の作品なのである。ペルゴレージ自身が書いたのは11曲中、第2曲、第3曲a、第7曲、第8曲aの4曲

のみ。

かくして《プルチネッラ》は、二重のニセに包まれた——しかし実に魅力的な——音楽として我々の眼前に置かれることになったわけである。

作曲年代	[バレエ版] 1920年完成 [管弦楽組曲版] 1922年
初演	[バレエ版] 1920年5月15日、エルネスト・アンセルメ指揮、ロシア・バレエ団、パリ・オペラ座 [組曲版] 1922年12月22日、ピエール・モントゥー指揮、ボストン交響楽団
楽器編成	フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット1、トロンボーン1、弦楽、独奏 弦楽五重奏(第1ヴァイオリン1、第2ヴァイオリン1、ヴィオラ1、チェロ1、コントラバス1)

ブラームス

交響曲 第1番 ハ短調 作品68

ヨハネス・ブラームス(1833~1897)が死去したのは1897年のこと。意外に「最近」なのである。

街にはベンツ社が開発したガソリン自動車走っており、電話や蓄音機もすでに実用化されている。オリент急行に乗れば、ウィーン〜パリ間はもとより、イスタンブールまで足を延ばすのも容易。音楽の世界を覗いてみると、ワーグナーやブルックナーの全作品はもちろん、マーラーの《交響曲第3番》、R. シュトラウスの《ツァラトゥストラはこう語った》、ドビュッシーの《牧神の午後への前奏曲》、そしてシェーンベルクの初期歌曲やピアノ作品が、すでに世に出ている。

そう考えると、ブラームスという作曲家の置かれていた位置がよく分かるはずだ。

先に挙げた作曲家たちが必死で「未来」に目を向けていたのに対して、ブラームスは「過去」を徹底的に研究し、そこから次の道を見いだそうとしていた。その最初の成果が《交響曲第1番》である。

完成は1876年。ハンスリックによる初演評が面白い。「……ブラームスは、感性の美しさを犠牲にしてまでも偉大なるもの、厳粛なるもの、重々しいもの、あるいは複雑なものをいささか好みすぎるようである。私たちは最高の対位法的技術ばかりではなく、心はやる陽光も欲しいと思う」。なるほど、この交響曲は尋常ではない重苦しさに包まれているが、それはまさに過去を背負い、そしてそこから脱しようとする必死の努力ゆえといえよう。

第1楽章冒頭で、まずは誰もが驚く。ティンパニの連打の上で、弦楽器が半音階で上昇するという斬新な趣向。しかし一方で、激烈な展開部のなかでも、優しい旋律が現れるのがブラームス流だ。3部形式をとる第2楽章は、150曲以上のリートを残した作曲家ならではの緩徐楽章(この楽章は初演時にはロンド的な形式をとっていたという)。第3楽章は、クラリネットがリードする素朴な音楽だが、スケルツォとメヌエットの両方の性格を持ってい

るあたりに工夫があろう。

そして**第4楽章**、重苦しい序奏のあとに「歓喜」の主題が現れ、壮大な凱歌を奏でる。ベートーヴェンの《第9》との類似が指摘されることもあるが、例えば同時代のブルッフ《交響曲第2番》でもまったく同様の趣向が用いられている。してみると重要なのは旋律の類似ではなく、「最後に満を持して雄大な旋律が現れ、全編の結論を提示する」という終楽章の役割なのだ。かくして交響曲は大団円に達して全曲を閉じる。

作曲年代	1876年完成
初演	1876年11月4日、カールスルーエ、オットー・デッツォフ指揮、カールスルーエ宮廷管弦楽団
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、弦楽

ドイツ・オーストリアの伝統を引き継ぐ

ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms (1833–1897)

バッハ、ベートーヴェンと並んで「3B」のひとつに数えられるブラームスだが、交響曲というジャンルにはなかなか手を出さなかった。先達ベートーヴェンが音楽史上に打ち建てた金字塔ともいべき9つの交響曲のあと、どのように

その偉業を受け継いでゆけば良いのかは、大きく重い問いだったのだ。長い構想期間を経たのち、暗から明へという構造を踏襲しながら、ついにブラームスは《交響曲第1番》でその答えを形にしている。

C
2025
JANUARY
[第2029回]



クララへのバースデーカードに書かれた小さな歌は《交響曲第1番》の第4楽章でホルンが奏でる旋律の原型にイラストレーション: ©IKE

クララとブラームス

ローベルト・シューマンとクララ・シューマン夫妻の知己を得て、ブラームスは楽壇にデビューした。以来、夫妻とは親しく交流し、シューマンが早世してしまったのちは、クララやその子ども達を親身になって援助している。ブラームスのクララへの気持ちは、尊敬、敬慕、強い愛情、深い友情と、形を変えながら終生交流が続いた。

N響百年史

第五十二回 — ワインガルトナー、来たる！

片山杜秀 — Morihide Katayama

二〇二六年のN響創立百周年に向け、NHK「クラシックの迷宮」のパーソナリティとしてもお馴染みの思想史研究者で音楽評論家の片山杜秀さんが、時代背景とともにN響の歴史をひもときます。大正期に山田耕筰、近衛秀麿率いるオーケストラを聴いて育った若き作曲家たちの才能が、昭和に入って一気に開花。そんな折り、巨匠ワインガルトナーが来日します。

山田、近衛に次ぐ管弦楽作家は？

新交響楽団（現NHK交響楽団）は、その初期の活動において、日本人作曲家の手になるオーケストラ音楽をあまり演奏しなかった。そういう定評があった。事実、ある程度そうだったろう。なぜだろうか。

新交響楽団が結成されたのは改めて確認するまでもなく1926年10月5日。元号でいうと大正15年。年末には大正天皇が崩御し、昭和元年となる。その頃、日本の作曲家はオーケストラ音楽を作りがっていたらうか。そんな人はまだあまりいなかった。1886（明治19）年生まれの山田耕筰くらいといってよかった。どうしてそうだったか。管弦楽作家が現れにくかったか。オーケストラの作曲が技術的に大変ということもある。が、山田の世代になるとその面はかなり克服されてはきていた。山田のように早くに留学して本場でオーケストラを深く学ぶ音楽家も現れた。

でも絵画や小説と違って、オーケストラ音楽は作れるから作ればよいという性質のものではない。絵画には展示の場が、小説には発表の場が必要だが、管弦楽曲もそうだ。ピアノ伴奏歌曲なら歌い手とピアニストのふたりでできる。ピアノ曲ならひとりで済む。が、交響楽団となると何十人。日本には明治時代から宮中や東京音楽学校（現東京藝術大学音楽学部）などにオーケストラはあるにはあったが、それは国家の持ち物。作曲家個人が作品を発表したいと頼んでも無理な話なのである。要するに作っても演奏までなかなかゆかない。それなのに何十段もの譜面を書くという膨大な労力を注ぎ込めるのか？ どうせ書くなら音になりやすい分野で勝負したい。作曲家の人情である。だから大正か

ら昭和の初期になっても、日本人のオーケストラ音楽はとても少なかった。演奏環境が作曲家の創作意欲を著しく制約していた。

そこに反旗を翻したのが山田だった。どうしても自分のオーケストラ音楽を音にしたい。その執念が山田を支え、そんな山田を主演にして展開したのが大正期のオーケストラ運動だった。当然ながら無理も多かった。山田は無茶を重ねた。トラブルも絶えなかった。それでもようやく日本交響楽協会というオーケストラをついに軌道に乗せたかに見えた。将来有望な作曲家兼指揮者、1898(明治31)年生まれの近衛秀麿を弟子に持ち、手を携えてやっていけるかに思われた。ところが決裂した。山田を排除して新しくできたオーケストラが、近衛の率いる新交響楽団に他ならない。これまで見てきたとおりである。つまり、大正時代の日本のオーケストラ音楽の最大にして圧倒的な書き手、山田の作品を、設立経緯ゆえに絶対に演奏しないというところから、新交響楽団の歴史は始まったのだ。しかも近衛は欧米でも披露できる高水準の日本人作品しかやりたくないと言い、近衛の認識では、その一番手は山田で、二番手は近衛自身で、三番手と呼べるほどの作曲家はなかなかいない。でも山田の曲はやらない。となると近衛しか残らない。そういう理屈だ。初期の新交響楽団が日本人作品に冷たいといわれた理由だろう。

若き作曲家たちの台頭

だが、昭和に入ると事情はどんどん変わる。近衛と同じ1890年代後半生まれの世代以降、管弦楽作家が増え始め、作品数もうなぎ上り。作曲家たちが発表機会を強く求め、それが

新交響楽団に対する大きな圧力ともなる。もちろん時代相応の背景がある。山田の世代だと、日清戦争と日露戦争の間に多感な少年期を過ごし、日露戦争の頃に東京音楽学校に入るくらい。西洋音楽に思い入れて、音楽学校進学に至るのは、特殊中の特殊といってよい。山田の場合は幼少期からのキリスト教音楽との結びつきがあつてこそ。ところが1890年代後半の生まれとなると、日露戦争が終わってからが本格的な少年期。司馬遼太郎風にいえば「坂の上の雲」を目指す国家的・国民的緊張がようやく解ける。自由主義的、個人主義的風潮が急激に満ちる。正岡子規の俳句や夏目漱石の小説が当たり前のようにある。そのあとは大正デモクラシーや第1次世界大戦期の経済成長の時期になる。都市富裕層が桁違いに増える。SPレコードも普及する。もろもろの楽器も入手が容易になる。アマチュアの演奏活動も隆盛する。西洋音楽に興味を持つ裾野がぐんと広がる。そこから作曲を志す人も増えてくる。管弦楽総譜や西洋音楽理論書も入手しやすくなる。独学も容易に行く大金持ちの子弟も現れる。東京には山田や近衛のオーケストラ運動があり、本物の交響楽団を聴きやすくなる。かくて管弦楽作家は少しずつでなく、雨後の筍のように増殖した。

それでも近衛は、定期演奏会には稀に自作曲や自編曲の作品を取り上げる以外、なかなか日本人の曲を入れようとしなかった。山田耕筰とよりを戻すと山田の曲は多少やるようになるけれど。結局、山田でも近衛でもない日本人作曲家の作品が新交響楽団の定期に現れるのは1934(昭和9)年6月11日の第142回定期公演を待たねばならない。近衛が江藤輝の《谷崎潤一郎の戯曲「白狐ノ湯」による音楽会用組曲》を振った。その次は1935(昭和10)年12月4

日の第161回。アレクサンドル・モジレフスキーの指揮で諸井三郎の《交響曲第1番》。そのときはもう近衛は新交響楽団から去っていた。つまり近衛の日本人作品に対する壁はそれだけ厚かったわけだろう。

といっても、1934年まで、新交響楽団が近衛と山田以外の作品をシャットアウトしていたわけではない。特別公演や依頼公演、あるいは放送番組では、特に1930年代前半から、日本人の種々の作品を演奏するようになっていた。たとえば1932(昭和7)年には菅原明朗の《組曲「祭典物語」》や箕作秋吉《2つの詩》、1933(昭和8)年には大木正夫の《農民交響曲》や《交響組曲「信濃路」》、今川節の《舞踊組曲「四季」》、1934(昭和9)年には池内友次郎の《アマリス》や《短章組曲》、山本直忠の《青春時代》、深井史郎の《5つのパロディ》、小林董五郎の《交響詩「取引所」》、1935(昭和10)年には松浦和雄の《組曲「満洲の印象」》、千野照代の《小組曲》、大木正夫の《工場交響曲》、という風に。そして近衛と新交響楽団が決裂すると、オーケストラへの日本の作曲家たちの演奏要求は猛烈に強まって、諸井三郎の交響曲が定期的の曲目に登場するに至る。

この流れはむろん1936(昭和11)年に及ぶ。近衛の後釜に擬されかけた貴志康一は2月に《日本組曲》などを自作自演し、5月には大澤壽人がパリで世界初演された《交響曲第2番》や《ピアノ協奏曲第2番》を、やはり自らの指揮で日本初演する。さらにこの年、新交響楽団は日本作曲界の要求に応えるべく、日本人作品尽くしのコンサートを貴志の指揮によって企画するが、貴志の病気でうまくゆかない。ならば役者を変えるしかあるまい。1936年夏にやってきたヨゼフ・ローゼンシュトックが企画を受け継ぐことになった。彼が選曲して指揮をする。シュレー

カー門下の作曲家でもあり、表現主義から新古典主義まで、欧州最新の作曲動向に精通し、新作を数多く指揮してきた彼なのだ。うってつけではないか。ローゼンシュトックの目になつたのは、荻原利次の《交響組曲「3つの世界」》、平尾貴四男の《古代旋法に依る緩徐調》(のちに《古代讃歌》と改題)、深井史郎の《パロディ的な4楽章》(《5つのパロディ》の改作)、諸井三郎の《ピアノ協奏曲第1番ハ長調》、江文也の《俗謡に基く交響的エチュード》。以上5つは1937(昭和12)年1月29日、日比谷公会堂で披露された。ローゼンシュトックは深井の機智に富んだ曲をいちばん気に入っていた。

巨匠ワインガルトナー、新響を絶賛す!

それから約4か月後の5月31日、新交響楽団は、日墺協会と朝日新聞の招聘した大指揮者と共演した。フェリックス・ワインガルトナー(1863~1942)である。リヒャルト・シュトラウスやマーラーと同世代人であり、1908年から1927年までウィーン・フィルハーモニー管弦楽団を率いた。ローゼンシュトックの後を受けて新交響楽団改め日本交響楽団の指揮者となる尾高尚忠はウィーンでのワインガルトナーの門下生だ。そんな巨匠が、3人目か4人目の若い妻で指揮者のカルメン・ワインガルトナーと共に来日したのである。

新交響楽団は日墺協会と朝日新聞からの依頼公演を引き受けたかたちで、5月31日の東京を皮切りに、静岡、名古屋、京都、大阪、再び東京と、約1か月間、共に演奏し旅をして、巨匠はベートーヴェンの《交響曲第3番》《第5番》《第6番》《第8番》、ブラームスの同じく《第1番》、シューベルトの《未完成》などを振った。SP

レコードで日本でも古くからおなじみの世界的大指揮者の来日となると、このときが本邦初とあってよい。音楽ファンにもわか[・]の聴衆も熱狂した。ワインガルトナー夫妻は各地で歓迎の嵐に揉まれ、大感激。極東にこんな熱心な音楽ファンがかくも大勢いるとは！

演奏成果も上々だった。巨匠は新交響楽団を褒めちぎった。楽員は真面目で、指揮の意図をよく汲み取り、楽曲も的確に理解していて、フレージングも勘所を押さえており、リズム感も申し分なく、強弱も幅広くコントロールできる。欧州のそれなりの楽団の水準を十分に示している。新交響楽団はひとつお墨付きをもらった。楽団員も巨匠に心服して、以後、このときの成功は神話化して伝承された。チェロの大熊次郎は戦後にこう振り返る。「ワインガルトナー先生の棒というのは、そんなに細かくないのですが、でも腹から無数の電波が出ているような感じがするのですよ。それで僕達が受信機になるわけですね。刻々に電波を感じねばならないのだね。棒を振らないで黙って突立っているだけで指揮が出来る人なんだよ」(『フィルハーモニー』1956年9・10月号)。これはもうトスカニーニ流にビシバシと振るローゼンシュトックの正反対である。ワインガルトナーとローゼンシュトックで指揮の両極というようなものだ。そのどちらにも対応できるくらい、この頃の新交響楽団はけっこうまくなっていたのだろう。

ワインガルトナーは日本での成功に大いに気をよくした。日本の音楽界に恩返しをしよう。日

本の管弦楽作家たちの成長ぶりも滞在中に把握したようである。それならば自分が審査して日本人作曲家向けのオーケストラ作品のコンクールを開き、受賞作を自分が欧州で指揮して紹介しようではないか。日本の作曲家たちは争って応募した。が。審査には思いのほか、時間がかかった。アジアも欧州も戦争の影に覆われ、ワインガルトナーの暮らしも落ち着かなくなっていったからである。審査発表は1939(昭和14)年になってから。特賞に選ばれたのは、尾高尚忠の《日本組曲》、箕作秋吉の《小交響曲》、早坂文雄の《古代の舞曲》、呉泰次郎の《主題と変奏》、大木正夫の《5つのお伽噺》と《夜の思想》。でもワインガルトナーがこれらの曲を振ることはついになかったと思われる。日本はナチスに接近し、ワインガルトナーはという反ナチスの立場。彼が日本の曲を欧州に紹介できる環境はほんの何年かのうちに失われてしまっていた。戦争がなければ、日本の近代の作曲の知られ方、広まり方は、ずいぶんと違っていただろう。

文 | 片山杜秀(かたやま もりひで)

思想史研究者、音楽評論家。慶應義塾大学法学部教授。2024年11月1日付で水戸芸術館館長に就任。2008年、『音盤考現学』『音盤博物誌』で吉田秀和賞、サントリー学芸賞を受賞。『クラシックの核心』『ゴジラと日の丸』『近代日本の右翼思想』『未完のファシズム』『見果てぬ日本』『尊皇攘夷』『大衆必易』ほか著書多数。

2025年2月定期公演のプログラムについて

公演企画担当者から

ブラハ放送交響楽団やウィーン交響楽団の首席指揮者を務める注目のペトル・ポペルカがN響に初登場。きっかけは2022年夏、東京交響楽団への客演だった。熱演に接した筆者は、急な代役に彼を抜擢した同団に敬意を表しつつ、いつかN響にも呼びたいと考えた。2年半を経て、ようやくそのチャンスが到来する。初共演の選曲はかなり難航したが、2種類のプログラムには、ポペルカの母国チェコとドイツ音楽への愛が詰まっている。

ポペルカがこだわり抜いた 2つの“シンフォニエッタ”をめぐるプログラム

[Aプログラム]の両端はどちらも《シンフォニエッタ》。長年ブラハの劇場で指揮者を務めたツェムリンスキーは、チェコとの関わりが深い。さまざまな民族的要素が複雑にミックスされている点に、彼の音楽の最大の魅力があるとポペルカは言う。ブラハで初演された《シンフォニエッタ》は、オペラ指揮者らしい劇的な構成が印象的だ。一方、ヤナーチェク《シンフォニエッタ》は、村上春樹の『1Q84』で一躍有名になった。13本の金管楽器とティンパニが奏でるファンファーレは、音響的にも視覚的にも絶大なインパクトを持つ。

ドヴォルザーク《のぼと》は、ヤナーチェクの

指揮で初演された。夫を毒殺して若い男との再婚を企てた女が、良心の呵責^{かしやく}から自殺するという物語に拠っている。華やかなワルツの結婚シーンはやがて、亡夫の墓に巣を作った、のぼとの悲しげな鳴き声に取って代わられる。光と闇が交錯する展開は、ツェムリンスキーにも通じるように思われる。

R. シュトラウス《ホルン協奏曲第1番》のソリストは、チェコ出身の名手ラデク・バボラーク。同国人ポペルカと息の合った演奏を聴かせてくれるだろう。

本領のドイツ・オーストリア音楽で際立つ ポペルカの繊細な音楽性

[Bプログラム]でモーツァルトのコンサート・アリアを歌うのは、エマ・ニコロフスカ。デビュー以来、彼女の活動に注目してきたというポペルカが共演を希望した。

3曲のうちのひとつ、《「とどまって下さい、ああいとしい人よ」K. 528》は、チェコと密接な繋がりがある。モーツァルトが、ブラハで滞在した館の持ち主、ドゥーシェク夫妻のために作曲したからだ。優れた歌手だった妻のヨゼファは、モーツァルトを軟禁して無理やり曲を書かせたと言い伝えられている。

元コントラバス奏者という経歴が示す通り、

ポペルカの音楽作りには、豊かなバスの上に響きを重ねていく安定感、和音が変わるたびに音色を細やかに変化させていく繊細さが感じられる。こうした持ち味は、モーツァルト《交響曲第25番》やシューマン《交響曲第1番「春」》といったドイツ音楽の中心的レパートリーで、より明瞭に表れるだろう。とりわけ詩情あふれるシューマンは、ポペルカの最愛の作曲家である。N響が培った伝統との間に、幸せな相乗効果がもたらされることを期待したい。

**下野竜也が贈る
誰もが気軽に楽しめるオペレッタの名曲**

[Cプログラム]は気軽に楽しめるオペレッタを中心に組み立てた。正指揮者・下野竜也の、いつもとはひと味違ったユーモラスな一面が垣間見えるはずだ。

《パリの喜び》は、19世紀後半にパリで盛

んに上演されたオッフェンバックの人気オペレッタを組み合わせたバレエ音楽。中でも有名なのは《地獄のオルフェ》の〈カンカン〉であろう。賑やかな作品は、《ホフマンの舟歌》で豊かな余韻とともに締めくくられる。

オッフェンバックと同年生まれのスツペは、ウィーンを舞台にオペレッタを量産した。騎馬のギャロップを思わせる金管のテーマが特徴的な《喜歌劇「軽騎兵」序曲》や、《喜歌劇「詩人と農夫」序曲》は、その代表作である。

サン・サーンスは、同時代のフランス音楽界をリードした作曲家。《ヴァイオリン協奏曲第3番》は、三浦文彰が下野竜也との初共演でも弾いた思い出の曲である。8分の6拍子の優雅な第2楽章は、《ホフマンの舟歌》に呼応している。

[西川彰一／NHK交響楽団 芸術主幹]

A 2/8 土 6:00pm
2/9 日 2:00pm
NHKホール

ツェムリンスキー／シンフォニエッタ 作品23
R. シュトラウス／ホルン協奏曲 第1番 変ホ長調 作品11
ドヴォルザーク／交響詩「のぼと」作品110
ヤナーチェク／シンフォニエッタ
指揮：ペトル・ポペルカ ホルン：ラデク・バボラーク



B 2/13 木 7:00pm
2/14 金 7:00pm
サントリーホール

モーツァルト／アリア「私は行く、だがどこへ」K. 583*
モーツァルト／アリア「大いなる魂と高貴な心は」K. 578*
モーツァルト／交響曲 第25番 短調 K. 183
モーツァルト／レチタティーヴォとアリア
「私のうるわしい恋人よ、さようなら—とどまって下さい、
ああいとしい人よ」K. 528*
シューマン／交響曲 第1番 変口長調 作品38「春」
指揮：ペトル・ポペルカ メゾ・ソプラノ：エマ・ニコロフスカ*



C 2/21 金 7:00pm
2/22 土 2:00pm
NHKホール

スツペ／喜歌劇「軽騎兵」序曲
サン・サーンス／ヴァイオリン協奏曲 第3番 短調 作品61
スツペ／喜歌劇「詩人と農夫」序曲
オッフェンバック(ロザンタール編)／バレエ音楽「パリの喜び」(抜粋)
指揮：下野竜也 ヴァイオリン：三浦文彰



チケットのご案内(定期公演 2024年9月～2025年6月)

定期会員券

毎回同じ座席をご用意。1回券と比べて1公演あたり10～44%お得です！（一般料金の場合。ユースチケットでは最大57%お得です。割引率は公演や券種によって異なります）

発売開始日 (10:00amからの受付)	年間会員券、シーズン会員券(Autumn)	2024年7月7日[日](定期会員先行) / 2024年7月15日[月・祝](一般)
	シーズン会員券(Winter)	2024年10月10日[木](定期会員先行) / 2024年10月15日[火](一般)
	シーズン会員券(Spring)	2025年2月13日[木](定期会員先行) / 2025年2月19日[水](一般)

料金(税込)

年間会員券		S	A	B	C	D
Aプログラム(9回)	一般	¥76,500(¥8,500)	¥65,025(¥7,225)	¥49,725(¥5,525)	¥41,310(¥4,590)	¥32,895(¥3,655)
	ユースチケット	¥38,250(¥4,250)	¥30,600(¥3,400)	¥23,715(¥2,635)	¥19,503(¥2,167)	¥11,475(¥1,275)
Bプログラム(9回)	一般	¥91,800(¥10,200)	¥76,500(¥8,500)	¥61,200(¥6,800)	¥49,725(¥5,525)	¥42,075(¥4,675)
	ユースチケット	¥45,900(¥5,100)	¥38,250(¥4,250)	¥30,600(¥3,400)	¥24,858(¥2,762)	¥21,033(¥2,337)
Cプログラム(8回)	一般	¥68,000(¥8,500)	¥57,800(¥7,225)	¥44,200(¥5,525)	¥36,720(¥4,590)	¥29,240(¥3,655)
	ユースチケット	¥34,000(¥4,250)	¥27,200(¥3,400)	¥21,080(¥2,635)	¥17,336(¥2,167)	¥10,200(¥1,275)

シーズン会員券		S	A	B	C	D
Aプログラム(3回)	一般	¥26,850(¥8,950)	¥22,824(¥7,608)	¥17,454(¥5,818)	¥14,499(¥4,833)	¥11,547(¥3,849)
Cプログラム [Autumn/Winter](3回)	ユースチケット	¥13,425(¥4,475)	¥10,740(¥3,580)	¥8,325(¥2,775)	¥6,849(¥2,283)	¥4,029(¥1,343)
Cプログラム [Spring] (2回)	一般	¥17,900(¥8,950)	¥15,216(¥7,608)	¥11,636(¥5,818)	¥9,666(¥4,833)	¥7,698(¥3,849)
	ユースチケット	¥8,950(¥4,475)	¥7,160(¥3,580)	¥5,550(¥2,775)	¥4,566(¥2,283)	¥2,686(¥1,343)

()内は1公演あたりの単価
※本シーズンよりD席のみ設定されていた「ユースチケット会員券」を、全席種(S～D)に拡大しました。
※本シーズンより定期会員券の料金を改定させていただきます。何卒ご了承のほどお願い申し上げます。

1回券

公演ごとにチケットをお買い求めいただけます。料金は公演によって異なります。各公演の情報をご覧ください。

発売開始日 (10:00amからの受付)	9・10・11月	2024年7月31日[水](定期会員先行) / 2024年8月4日[日](一般)
	12・1・2月	2024年10月17日[木](定期会員先行) / 2024年10月23日[水](一般)
	4・5・6月	2025年2月26日[水](定期会員先行) / 2025年3月2日[日](一般)

※本シーズンより1回券の料金を改定させていただきます。何卒ご了承のほどお願い申し上げます。

ユースチケット

N響では、若い世代の方にオーケストラを身近に感じていただくことを願って、お得な「ユースチケット」を設けています。詳しくはN響ホームページをご覧ください。※初回ご利用時に年齢確認のための「ユース登録」が必要となります。

ユース世代の方へのお得なチケットが、さらに使いやすく！

対象年齢を拡大

定期会員券の対象席種を拡大

2024年7月の主催公演から対象年齢を「29歳以下」に拡大しました
[S席～D席の全席種]に拡大しました

お申し込み

WEBチケットN響
<https://nhkso.pia.jp>



N響ガイド | TEL 0570-02-9502

営業時間：10:00am～5:00pm / 定休日：土・日・祝日

●東京都内での主催公演開催日は曜日に関わらず10:00am～開演時刻まで営業
●発売初日の土・日・祝日は10:00am～3:00pmの営業 ●電話受付のみの営業

※やむを得ない理由で出演者や曲目等が変更となる場合や、公演が中止となる場合がございます。公演中止の場合をのぞき、チケット代金の払い戻しはいたしません。

Please follow us on



N響ニュースレター

最新情報をメールでお届けします。
WEBチケットN響の「利用登録」から登録ください。

2024-25定期公演プログラム

2025 01	A	第2028回	ソビエフが《レニングラード交響曲》に万感の思いを込める ショスタコヴィチ没後50年 ショスタコヴィチ / 交響曲 第7番 八長調 作品60「レニングラード」	一般 ユースチケット S ¥11,000 S ¥5,500 A ¥9,500 A ¥4,500 B ¥7,600 B ¥3,500 C ¥6,000 C ¥2,800 D ¥5,000 D ¥1,800 E ¥3,000 E ¥1,400
		1/18 土 6:00pm 1/19 日 2:00pm		
		NHKホール	指揮:トゥガン・ソビエフ	
2025 02	B	第2030回	音の魔術師のタクトが紡ぎだす 東欧の情緒に身をゆだねる ムソルグスキー(リャートフ編) / 歌劇「ソロチンツィの市」―[序曲]「ゴバック」 バルトーク / ヴァイオリン協奏曲 第2番 ドヴォルザーク / 交響曲 第8番 長調 作品88	一般 ユースチケット S ¥12,000 S ¥6,000 A ¥10,000 A ¥5,000 B ¥8,000 B ¥4,000 C ¥6,500 C ¥3,250 D ¥6,500 D ¥2,750
		1/30 木 7:00pm 1/31 金 7:00pm		
		サントリーホール	指揮:トゥガン・ソビエフ ヴァイオリン:郷古 廉 (N響第1コンサートマスター)	
2025 01	C	第2029回	世紀を超えて受け継がれる“古典”の精神 ストラヴィンスキー / 組曲「プルチネッタ」 ブラームス / 交響曲 第1番 八短調 作品68	一般 ユースチケット S ¥11,000 S ¥5,500 A ¥9,500 A ¥4,500 B ¥7,600 B ¥3,500 C ¥6,000 C ¥2,800 D ¥5,000 D ¥1,800 E ¥3,000 E ¥1,400
		1/24 金 7:00pm 1/25 土 2:00pm		
		NHKホール	指揮:トゥガン・ソビエフ	
2025 02	A	第2031回	チェコが生んだ新時代の巨匠ボヘルカがN響デビュー ツェムリンスキー / シンフォニエッタ 作品23 R. シュトラウス / ホルン協奏曲 第1番 変ホ長調 作品11 ドヴォルザーク / 交響詩「のぼと」作品110 ヤナーチェク / シンフォニエッタ	一般 ユースチケット S ¥10,000 S ¥5,000 A ¥8,500 A ¥4,000 B ¥6,500 B ¥3,100 C ¥5,400 C ¥2,550 D ¥4,300 D ¥1,500 E ¥2,200 E ¥1,000
		2/8 土 6:00pm 2/9 日 2:00pm		
		NHKホール	指揮:ベトル・ボヘルカ ホルン:ラデク・パボラーク	
2025 02	B	第2032回	世界の音楽界が熱視線を注ぐ 若き巨匠によるドイツ・プログラム モーツァルト / アリア「私は行く、だがどこへ」K. 583*、 アリア「大いなる魂と高貴な心は」K. 578*、 交響曲 第25番 短調 K. 183、レチタティーヴォとアリア「私のうるわし い恋人よ、さようなら〜とどまって下さい、ああいどしい人よ」K. 528* シューマン / 交響曲 第1番 変ロ長調 作品38「春」	一般 ユースチケット S ¥12,000 S ¥6,000 A ¥10,000 A ¥5,000 B ¥8,000 B ¥4,000 C ¥6,500 C ¥3,250 D ¥6,500 D ¥2,750
		2/13 木 7:00pm 2/14 金 7:00pm		
		サントリーホール	指揮:ベトル・ボヘルカ メゾ・ソプラノ:エマ・ニコロフスカ*	
2025 02	C	第2033回	下野竜也が誘うオペレッタ名旋律の世界 スッペ / 喜歌劇「軽騎兵」序曲 サン・サーンス / ヴァイオリン協奏曲 第3番 短調 作品61 スッペ / 喜歌劇「詩人と農夫」序曲 オッフェンバック(ロザンタル編) / バレエ音楽「パリの喜び」(抜粋)	一般 ユースチケット S ¥10,000 S ¥5,000 A ¥8,500 A ¥4,000 B ¥6,500 B ¥3,100 C ¥5,400 C ¥2,550 D ¥4,300 D ¥1,500 E ¥2,200 E ¥1,000
		2/21 金 7:00pm 2/22 土 2:00pm		
		NHKホール	指揮:下野竜也 ヴァイオリン:三浦文彰	
2025 04	A	第2034回	ベルリオーズとプロコフィエフ 通底するテーマは「さすらい人」 ベルリオーズ / 交響曲「イタリアのハロルド」* プロコフィエフ / 交響曲 第4番 八長調 作品112(改訂版 / 1947年)	一般 ユースチケット S ¥11,000 S ¥5,500 A ¥9,500 A ¥4,500 B ¥7,600 B ¥3,500 C ¥6,000 C ¥2,800 D ¥5,000 D ¥1,800 E ¥3,000 E ¥1,400
		4/12 土 6:00pm 4/13 日 2:00pm		
		NHKホール	指揮:バーヴォ・ヤルヴィ ヴィオラ:アントワーヌ・タメステイ*	
2025 04	B	第2035回	《春の祭典》に続きバーヴォ&N響が贈る ストラヴィンスキー 三大バレエ第2弾 ストラヴィンスキー / バレエ音楽「ベトルーシカ」(全曲 / 1947年版) プリテン / ピアノ協奏曲 作品13 プロコフィエフ / 交響組曲「3つのオレンジへの恋」作品33bis	一般 ユースチケット S ¥12,000 S ¥6,000 A ¥10,000 A ¥5,000 B ¥8,000 B ¥4,000 C ¥6,500 C ¥3,250 D ¥6,500 D ¥2,750
		4/17 木 7:00pm 4/18 金 7:00pm		
		サントリーホール	指揮:バーヴォ・ヤルヴィ ピアノ:ベンジャミン・グローヴァナー(プリテン)、松田華音(ストラヴィンスキー)	
2025 04	C	第2036回	4月Cプログラムはヨーロッパ公演のため休止させていただきます	
		4/19 土 7:00pm 4/20 日 2:00pm		
		NHKホール		

	A NHKホール	B サントリーホール	C NHKホール
	開場5:00pm 開演6:00pm 開場1:00pm 開演2:00pm	開場6:20pm 開演7:00pm 開場6:20pm 開演7:00pm	開場6:00pm 開演7:00pm 開場1:00pm 開演2:00pm
2025 05	A 第2036回 4/26 [土] 6:00pm 4/27 [日] 2:00pm ※5月定期公演Aプログラムは4月に開催いたします。 NHKホール	ヨーロッパ公演に先駆け 勝負曲を定期公演で披露 N響ヨーロッパ公演2025 プログラム マラー／交響曲 第3番 二短調 指揮:ファビオ・ルイーゼ ユー・ソプラノ:オレシア・ベトロヴァ 女声合唱:東京オペラシンガーズ 児童合唱:NHK東京児童合唱団	一般 ユースチケット S ¥15,000 S ¥7,000 A ¥12,500 A ¥6,000 B ¥10,000 B ¥5,000 C ¥8,000 C ¥4,000 D ¥6,500 D ¥3,000 E ¥4,500 E ¥2,000
	B 第2037回 5/1 [木] 7:00pm 5/2 [金] 7:00pm サントリーホール	軋みあう“生と死”を越克し その彼方の光へ N響ヨーロッパ公演2025 プログラム ベルク／ヴァイオリン協奏曲 マラー／交響曲 第4番 長調* 指揮:ファビオ・ルイーゼ ヴァイオリン:諏訪内晶子 ソプラノ:森 麻季*	一般 ユースチケット S ¥12,000 S ¥6,000 A ¥10,000 A ¥5,000 B ¥8,000 B ¥4,000 C ¥6,500 C ¥3,250 D ¥5,500 D ¥2,750
	C 第2038回 5/30 [金] 7:00pm 5/31 [土] 2:00pm NHKホール	オペラ指揮者シュレキーテのR. シュトラウス! N響定期初登場、藤田真央にも注目! シューベルト「ロザムンデ」序曲 ドホナーニ／童謡(きらきら星)の主題による交響曲 作品25* R. シュトラウス／歌劇「影のない女」による交響的幻想曲 R. シュトラウス／歌劇「ばらの騎士」組曲 指揮:ギエドレ・シュレキーテ ピアノ:藤田真央*	一般 ユースチケット S ¥10,000 S ¥5,000 A ¥8,500 A ¥4,000 B ¥6,500 B ¥3,100 C ¥5,400 C ¥2,550 D ¥4,300 D ¥1,500 E ¥2,200 E ¥1,000
2025 06	A 第2039回 6/7 [土] 6:00pm 6/8 [日] 2:00pm NHKホール	巨匠が魂を込めて振る チャイコフスキー最後の交響曲 リムスキー・コルサコフ／歌劇「5月の夜」序曲 ラフマニノフ／パガニーニの主題による狂詩曲 作品43* チャイコフスキー／交響曲 第6番 口短調 作品74「悲愴」 指揮:ウラディーミル・フェドセーエフ ピアノ:ユリアンナ・アヴデーエワ*	一般 ユースチケット S ¥10,000 S ¥5,000 A ¥8,500 A ¥4,000 B ¥6,500 B ¥3,100 C ¥5,400 C ¥2,550 D ¥4,300 D ¥1,500 E ¥2,200 E ¥1,000
	B 第2040回 6/12 [木] 7:00pm 6/13 [金] 7:00pm サントリーホール	チェリビダッケの直弟子 メナのブルクナー《第6番》 イベール／フルート協奏曲 ブルクナー／交響曲 第6番 イ長調 指揮:ファン・ホ・メナ フルード:カール・ハインツ・シュツツ	一般 ユースチケット S ¥12,000 S ¥6,000 A ¥10,000 A ¥5,000 B ¥8,000 B ¥4,000 C ¥6,500 C ¥3,250 D ¥5,500 D ¥2,750
	C 第2041回 6/20 [金] 7:00pm 6/21 [土] 2:00pm NHKホール	2000年生まれの新超新星 ベルトコススキのマラー《巨人》 コルンゴルト／ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品35 マラー／交響曲 第1番 二長調「巨人」 指揮:タルモ・ベルトコススキ ヴァイオリン:ダニエル・ロザコヴィッチ	一般 ユースチケット S ¥10,000 S ¥5,000 A ¥8,500 A ¥4,000 B ¥6,500 B ¥3,100 C ¥5,400 C ¥2,550 D ¥4,300 D ¥1,500 E ¥2,200 E ¥1,000 (料金はすべて税込)

※今後の状況によっては、出演者や曲目等が変更になる場合や、公演が中止となる場合があります。あらかじめご了承ください。

速報 2025-26定期公演プログラム(2025年9月~2026年6月)

2025 09	A	第2042回	シーズン開幕に満を持して臨む ルーゼのライフワーク ベートーヴェン／ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73「皇帝」 フランツ・シュミット／交響曲 第4番 ハ長調
		9/13(土) 6:00pm 9/14(日) 2:00pm	
	NHKホール	指揮:ファビオ・ルーゼージ ピアノ:イェフィム・ブロンフマン	
2025 09	B	第2043回	ルーゼージが浮き彫りにする《イタリア》に刻まれた「光と陰」 武満 徹／3つの映画音楽 ベートーヴェン／ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品61 メンデルスゾーン／交響曲 第4番 イ長調 作品90「イタリア」
		9/18(木) 7:00pm 9/19(金) 7:00pm	
	サントリーホール	指揮:ファビオ・ルーゼージ ヴァイオリン:マリア・ドゥエニャス	
2025 09	C	第2044回	欧米メジャーオーケを席卷する 情熱の指揮者が、響初登場 マーラー／子どもの不思議な角笛―「ラインの伝説」*「トランペットが美しく鳴り響くところ」* ―「浮世の生活」*「天上の生活」*「原光」* シベリウス／交響詩「4つの伝説」作品22
		9/26(金) 7:00pm 9/27(土) 2:00pm	
	NHKホール	指揮:ライアン・バンクロフト バリトン:トマス・ハンブソン*	
2025 10	A	第2046回	マエストロが祈りを込めて贈る 2つの合唱付き交響曲 ストラヴィンスキー／詩篇交響曲 メンデルスゾーン／交響曲 第2番 変ロ長調 作品52「讃歌」*
		10/18(土) 6:00pm 10/19(日) 2:00pm	
	NHKホール	指揮:ヘルベルト・ブロムシュテット ソプラノ:クリスティーナ・ランツハマー* メゾ・ソプラノ:マリー・ヘンリエッテ・ラインホルト* テノール:ティルマン・リヒディ* 合唱:スウェーデン放送合唱団	
2025 10	B	第2045回	ブロムシュテットが惹き込む 気品に満ちた北欧の傑作たち グリーグ／組曲「ホルベアの時代から」作品40 ニルセン／フルート協奏曲 シベリウス／交響曲 第5番 変ホ長調 作品82
		10/9(木) 7:00pm 10/10(金) 7:00pm	
	サントリーホール	指揮:ヘルベルト・ブロムシュテット フルート:セバスティアン・ジャコー	
2025 10	C	第2047回	巨匠の飽くなき探究心が拓く 新たなブラームスの地平 ブラームス／ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 作品83 ブラームス／交響曲 第3番 へ長調 作品90
		10/24(金) 7:00pm 10/25(土) 2:00pm	
	NHKホール	指揮:ヘルベルト・ブロムシュテット ピアノ:レイフ・オヴェ・アンズネス	
2025 11	A	第2048回	デュトワ、十八番のメシアンとホルストを携え 8年振りに定期公演に登場 メシアン／神の現存の3つの小典礼* ホルスト／組曲「惑星」作品32
		11/8(土) 6:00pm 11/9(日) 2:00pm	
	NHKホール	指揮:シャルル・デュトワ ピアノ:小菅 優* オンド・マルトノ:大矢素子* 女声合唱:東京オペラシンガーズ	
2025 11	B	第2050回	大きく羽ばたく俊英が 得意のドイツ・プログラムで再登場 シューマン／「マンフレッド」序曲 モーツァルト／ピアノ協奏曲 第25番 ハ長調 K. 503 R. シュトラウス／交響詩「英雄の生涯」作品40
		11/20(木) 7:00pm 11/21(金) 7:00pm	
	サントリーホール	指揮:ラファエル・パヤーレ ピアノ:エマニュエル・アックス	
2025 11	C	第2049回	ラヴェル生誕150年 当世随一の解釈者のタクトで ラヴェルを味わい尽くす ラヴェル／亡き王女のためのパヴァーヌ ラヴェル／組曲「クーブランの墓」 ラヴェル／バレエ音楽「ダフニスとクロエ」(全曲)*
		11/14(金) 7:00pm 11/15(土) 2:00pm	
	NHKホール	指揮:シャルル・デュトワ 合唱:二期会合唱団*	

速報 2025-26定期公演プログラム(2025年9月~2026年6月)

2025
12

A	第2051回	ショスタコーヴィチ、そして(人魚姫)を貫く アイデンティティ崩壊と蘇生の物語 ショスタコーヴィチ/ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 作品77 ツェムリンスキー/交響詩「人魚姫」
	11/29(土) 6:00pm 11/30(日) 2:00pm	指揮:ファビオ・ルイーゼ ヴァイオリン:レオニダス・カヴァコス
B	第2052回	オーケストラの絢爛な響きを サントリーホールの大オルガンと共に体感する 藤倉 大/NHK交響楽団 委嘱作品 [タイトル未定/世界初演] フランク/交響的変奏曲* サン・サーンス/交響曲 第3番 ハ短調 作品78「オルガンつき」
	12/4(木) 7:00pm 12/5(金) 7:00pm	指揮:ファビオ・ルイーゼ ピアノ:トム・ポロ*
C	第2053回	ニルゼン最高峰の交響曲を ルイーゼ入魂の指揮で味わう ショパン/ピアノ協奏曲 第1番 ホ短調 作品11 または第2番 ヘ短調 作品21 ニルゼン/交響曲 第4番 作品29「不滅」
	12/12(金) 7:00pm 12/13(土) 2:00pm	指揮:ファビオ・ルイーゼ ピアノ:第19回ショパン国際ピアノコンクール優勝者

2026
01

A	第2054回	ソヒエフ、満を持してN響でマーラーを初披露 マーラー/交響曲 第6番 イ短調「悲劇的」
	1/17(土) 6:00pm 1/18(日) 2:00pm	指揮:トウガン・ソヒエフ
B	第2056回	ソヒエフ、お家芸のプロコフィエフ(第5番)を13年振りにN響で指揮 ムソルグスキー(ショスタコーヴィチ編)/歌劇「ホヴァンシチナ」—前奏曲「モスクワ川の夜明け」 ショスタコーヴィチ/ピアノ協奏曲 第2番 へ長調 作品102 プロコフィエフ/交響曲 第5番 変ロ長調 作品100
	1/29(木) 7:00pm 1/30(金) 7:00pm	指揮:トウガン・ソヒエフ ピアノ:松田華音
C	第2055回	夢幻と高揚に誘う フランス・ロシアのナラティブな作品たち ドビュッシー/牧神の午後への前奏曲 デュティユー/チェロ協奏曲「遙かなる遠い国へ」 リムスキー・コルサコフ/組曲「サルタン皇帝の物語」作品57 ストラヴィンスキー/バレエ組曲「火の鳥」(1919年版)
	1/23(金) 7:00pm 1/24(土) 2:00pm	指揮:トウガン・ソヒエフ チェロ:上野通明

2026
02

A	第2057回	名門歌劇場で存在感を放つ ジョルダンのワーグナー シューマン/交響曲 第3番 変ホ長調 作品97「ライン」 ワーグナー/楽劇「神々のたそがれ」—「ジークフリートのラインの旅」 「ジークフリートの葬送行進曲」「ブリュンヒルデの自己犠牲」*
	2/7(土) 6:00pm 2/8(日) 2:00pm	指揮:フィリップ・ジョルダン ソプラノ:タマラ・ウィルソン*
B	第2059回	待望の再登場! フルシャのドヴォルザーク&ブラームス ドヴォルザーク/ヴァイオリン協奏曲 イ短調 作品53 ブラームス/セレナード 第1番 二長調 作品11
	2/19(木) 7:00pm 2/20(金) 7:00pm	指揮:ヤクブ・フルシャ ヴァイオリン:ヨゼフ・シュバチェク
C	第2058回	創立100年に問う N響設立者・近衛の《展覧会の絵》 コダーイ/ハンガリー民謡「くじゃく」による変奏曲 ファンメル/トランペット協奏曲 ホ長調 ムソルグスキー(近衛秀麿編)/組曲「展覧会の絵」
	2/13(金) 7:00pm 2/14(土) 2:00pm	指揮:ゲルゲイ・マダラシュ トランペット:菊本和昭(N響首席トランペット奏者)

A NHKホール 開場5:00pm 開演6:00pm 開場1:00pm 開演2:00pm	B サントリーホール 開場6:20pm 開演7:00pm 開場6:20pm 開演7:00pm	C NHKホール 開場6:00pm 開演7:00pm 開場1:00pm 開演2:00pm
---	---	---

2026 04	A 第2060回 4/11 土 6:00pm 4/12 日 2:00pm NHKホール	ブルックナーの絶筆に 孤高の中に屹立する精神を見る ハイドン／チェロ協奏曲 第1番 ハ長調 Hob. VIIb-1 ブルックナー／交響曲 第9番 二短調 指揮:ファビオ・ルイーゼ チェロ:ヤン・フォークラー	
	B 第2061回 4/16 木 7:00pm 4/17 金 7:00pm サントリーホール	モーツァルトとマーラーに通底する 絶対美の深淵に触れる モーツァルト／クラリネット協奏曲 イ長調 K. 622 マーラー／交響曲 第5番 嬰ハ短調 指揮:ファビオ・ルイーゼ クラリネット:松本健司(N響首席クラリネット奏者)	
	C 第2062回 4/24 金 7:00pm 4/25 土 2:00pm NHKホール	下野がナビゲートする20世紀日本名曲の旅 外山雄三／管弦楽のためのディヴェルティメント プロコフィエフ／ピアノ協奏曲 第3番 ハ長調 作品26 伊福部 昭／交響譚詩 プリテン／歌劇「ピーター・グライムズ」—「4つの海の間奏曲」作品33a 指揮:下野竜也 ピアノ:反田恭平	

2026 05	A 第2064回 5/23 土 6:00pm 5/24 日 2:00pm NHKホール	ドイツ音楽の深い洞察者と奏でるブラームス・プログラム ブラームス／ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲 イ短調 作品102 ブラームス(シェンベルク編)/ピアノ四重奏曲 第1番ト短調 作品25 指揮:ミハエル・ザンデルリネク ヴァイオリン:クリスティアン・テツラフ チェロ:ターニャ・テツラフ	
	B 第2063回 5/14 木 7:00pm 5/15 金 7:00pm サントリーホール	「ヤマカズ21」ととどる元祖ヤマカズの世界 そして1930年代の日独作品の諸相 山田一雄／小交響詩「若者のうたへる歌」 ハルトマン／葬送協奏曲* 須賀田磯太郎／交響的序曲 作品6 ヒンデミット／交響曲「画家マチス」 指揮:山田和樹 ヴァイオリン:キム・スーヤン*	
	C 第2065回 5/29 金 7:00pm 5/30 土 2:00pm NHKホール	旧ソ連・ソビエト出身の気鋭が明らかにする 謎多きショスタコーヴィチ(第4番)の真面目 ヴァスクス／NHK交響楽団ほか国際共同委嘱作品 [タイトル未定/日本初演] ショスタコーヴィチ／交響曲 第4番 八短調 作品43 指揮:アンドリス・ボーガ	

2026 06	A 第2067回 6/13 土 6:00pm 6/14 日 2:00pm NHKホール	ニューヨーク・フィルを率いたスヴェーデン 待望のN響初登場 ワーグナー／楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲 モーツァルト／ピアノ協奏曲 第17番ト長調 K. 453 バルトーク／管弦楽のための協奏曲 指揮:ヤープ・ヴァン・スヴェーデン ピアノ:コンラッド・タオ	
	B 第2066回 6/4 木 7:00pm 6/5 金 7:00pm サントリーホール	ドゥナーヴが編む「夏」と「海」をめぐるフランス音楽名曲選 オネゲル／交響詩「夏の牧歌」 ベルリオーズ／歌曲集「夏の夜」作品7 イベール／寄港地 ドビュッシー／交響詩「海」 指揮:ステファヌ・ドゥナーヴ メゾ・ソプラノ:ガエル・アルケーズ	
	C 第2068回 6/19 金 7:00pm 6/20 土 2:00pm NHKホール	尾高のリリシズムと相性抜群の北国の名作たち HIMARI、N響定期に初登場 シベリウス／アンダンテ・フェスティエーヴォ シベリウス／ヴァイオリン協奏曲 二短調 作品47 ラフマニノフ／交響曲 第3番 イ短調 作品44 指揮:尾高忠明 ヴァイオリン:HIMARI	

※今後の状況によっては、出演者や曲目等が変更になる場合や、公演が中止となる場合があります。あらかじめご了承ください。
 ※料金、発売日等チケットの詳細は2025年3月末に発表予定です。

特別公演

3/7[金] 7:00pm | 放送100年 N響大河ドラマ&名曲コンサート

東京オペラシティ コンサートホール

指揮: 広上淳一 ヴァイオリン: 三浦文彰* 特別ゲスト: 高橋英樹 司会: 田添菜穂子

[第1部 大河ドラマ編]

青天を衝け(2021/佐藤直紀)

軍師官兵衛(2014/菅野祐悟)

麒麟がくる(2020/ジョン・グラム)

翔ぶが如く(1990/一柳 慧)

篤姫(2008/吉俣 良)

元禄太平記(1975/湯浅譲二)

草燃える(1979/湯浅譲二)

徳川慶喜(1998/湯浅譲二)

真田丸(2016/服部隆之)*

べらぼう〜薦重栄華乃夢噺〜(2025/ジョン・グラム)

[第2部 「河」「川」にちなんだクラシック名曲選]

バッハ/ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 BWV1041*

ヘンデル(ハーティ編)/組曲「水上の音楽」—第1、3、4、6曲

ヨハン・シュトラウスII世/ワルツ「美しく青きドナウ」

グローフェ/組曲「ミシシッピ」—「マルディ・グラ」

料金(税込): 一般 | S席12,000円 A席10,000円 B席7,000円 C席5,000円

ユースチケット(29歳以下) | S席6,000円 A席5,000円 B席3,500円 C席2,500円

※B席、C席はステージの一部が見えづらい席となります。

※定期会員は一般料金の10%割引

チケット発売日: N響定期会員先行発売 | 1月9日(木) 10:00am

一般 | 1月14日(火) 10:00am

主催: NHK/NHK交響楽団 お問合せ: N響ガイド TEL (0570)02-9502

お申し込み

WEBチケットN響

<https://nhkso.pia.jp>



N響ガイド | TEL 0570-02-9502

営業時間: 10:00am ~ 5:00pm

定休日: 土・日・祝日

●東京都内での主催公演開催日は曜日に関わらず10:00am ~ 開演時刻まで営業

●発売初日の土・日・祝日は10:00am ~ 3:00pmの営業

●電話受付のみの営業

※やむを得ない理由で出演者や曲目等が変更となる場合や、公演が中止となる場合がございます。公演中止の場合をのぞき、チケット代金の払い戻しはいたしません。

各地の公演

2/2回 3:00pm | 第12回 NHK交響楽団いわき定期演奏会

いわき芸術文化交流館アリオス アルバイン大ホール

指揮: トゥガン・ソヒエフ ヴァイオリン: 郷古 廉

ムソルグスキー(リャードフ編) / 歌劇「ソロチンツイの市」—「序曲」「ゴバック」

バルトーク / ヴァイオリン協奏曲 第2番

ドヴォルザーク / 交響曲 第8番 ト長調 作品88

主催: いわき芸術文化交流館アリオス お問い合わせ: アリオスチケットセンター TEL(0246)22-5800

2/26回 7:00pm | NHK交響楽団 in Ichikawa

市川市文化会館

指揮: マルクス・ボシュナー ピアノ: 小林愛実

ベートーヴェン / 序曲「コリオラン」作品62

モーツァルト / ピアノ協奏曲 第9番 変ホ長調 K. 271

ベートーヴェン / 交響曲 第7番 イ長調 作品92

主催: (公財)市川市文化振興財団 お問い合わせ: (公財)市川市文化振興財団 TEL(047)379-5111

2/27回 7:00pm | NHK交響楽団演奏会 和歌山公演

和歌山県民文化会館大ホール

出演者・曲目は2月26日と同じ

主催: 和歌山県 / (一財)和歌山県文化振興財団 お問い合わせ: 和歌山県民文化会館 TEL(073)436-1331

3/1回 2:00pm | NHK交響楽団演奏会 高知公演

高知県立県民文化ホール

出演者・曲目は2月26日と同じ

主催: NHK高知放送局 / NHK交響楽団 お問い合わせ: ハローダイヤル TEL(050)5541-8600

3/2回 3:30pm | NHK交響楽団演奏会 高松公演

レクザムホール(香川県県民ホール)

出演者・曲目は2月26日と同じ

主催: NHK高松放送局 / NHK交響楽団 お問い合わせ: ハローダイヤル TEL(050)5541-8600

3/3 日 7:00pm | ユメニティのおがた開館25周年記念 NHK交響楽団 直方公演

ユメニティのおがた 大ホール

出演者・曲目は2月26日と同じ

主催:(公財)直方文化青少年協会 お問い合わせ:ユメニティのおがた TEL(0949)25-1007

3/8 日 3:00pm | NHK交響楽団 上田特別公演「大河ドラマ&名曲コンサート」

サントミュージゼ 上田市交流文化芸術センター 大ホール

指揮:広上淳一 ヴァイオリン:三浦文彰* 司会:田添菜穂子

青天を衝け(2021/佐藤直紀)

軍師官兵衛(2014/菅野祐悟)

麒麟がくる(2020/ジョン・グラム)

翔ぶが如く(1990/一柳 慧)

篤姫(2008/吉俣良)

元禄太平記(1975/湯浅譲二)

草燃える(1979/湯浅譲二)

徳川慶喜(1998/湯浅譲二)

真田丸(2016/服部隆之)*

べらぼう〜篇重栄華乃夢嘶〜(2025/ジョン・グラム)

バッハ/ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 BWV1041*

ヘンデル(ハーツィ編)/組曲「水上の音楽」—第1、3、4、6曲

ヨハン・シュトラウスII世/ワルツ「美しく青きドナウ」

グロフェ/組曲「ミシシッピ」—「マルディ・グラ」

主催:上田市(上田市交流文化芸術センター)/上田市教育委員会 お問い合わせ:サントミュージゼ 上田市交流文化芸術センター TEL(0268)27-2000

3/11 火 7:00pm

2025都民芸術フェスティバル参加公演

オーケストラ・シリーズ No.56 NHK交響楽団

すみだトリフォニーホール

指揮:大友直人 ピアノ:金子三勇士

スメタナ/交響詩「わが祖国」—「モルダウ」

リスト/ピアノ協奏曲 第2番 イ長調

ドヴォルザーク/交響曲 第9番 ホ短調 作品95「新世界から」

主催:お問合せ:(公社)日本演奏連盟 TEL(03)3539-5131

3/27(木) 3:00pm

東京・春・音楽祭2025 東京春祭ワグナー・シリーズ vol. 16

3/30(日) 3:00pm

《バルジファル》(演奏会形式)

東京文化会館 大ホール

指揮:マレク・ヤノフスキ アムフォルタス:クリスティアン・ゲルハーヘル ティトゥレル:水島正樹
グルネマンツ:タレク・ナズミ バルジファル:ステュアート・スケルトン クリングゾル:シム・インスン
クンドリ:ターニャ・アリアーネ・バウムガルトナー 第1の聖杯騎士:大槻孝志 第2の聖杯騎士:杉浦隆大
四人の小姓:秋本悠希、金子美香、土崎 謙、谷口耕平
クリングゾルの魔法の乙女たち:相原里美、今野沙知恵、杉山由紀、佐々木麻子、松田万美江、鳥谷尚子
アルトの声:金子美香 合唱:東京オペラシンガーズ
ワグナー/舞台神聖祝典劇「バルジファル」(全3幕)(演奏会形式/字幕付)

主催:東京・春・音楽祭実行委員会 共催:NHK交響楽団 お問合せ:東京・春・音楽祭サポートデスク TEL(050) 3496-0202

4/4(金) 7:00pm

東京・春・音楽祭2025 東京春祭 合唱の芸術シリーズ vol.12

4/6(日) 3:00pm

ベートーヴェン《ミサ・ソレムニス》

東京文化会館 大ホール

指揮:マレク・ヤノフスキ ソプラノ:アドリアナ・ゴンザレス メゾ・ソプラノ:ターニャ・アリアーネ・バウムガルトナー
テノール:ステュアート・スケルトン バス:タレク・ナズミ 合唱:東京オペラシンガーズ
ベートーヴェン/ミサ・ソレムニス 二長調 作品123

主催:東京・春・音楽祭実行委員会 共催:NHK交響楽団 お問合せ:東京・春・音楽祭サポートデスク TEL(050) 3496-0202

5/5(月祝) 5:00pm

NHK交響楽団

ファビオ・ルイージ[首席指揮者] リーズ・ドウ・ラ・サール[ピアノ]

所沢市民文化センター ミューズ アークホール

指揮:ファビオ・ルイージ ピアノ:リーズ・ドウ・ラ・サール
武満徹/3つの映画音楽
グリーグ/ピアノ協奏曲 イ短調 作品16
ブラームス/交響曲 第4番 ホ短調 作品98

主催:(公財)所沢市文化振興事業団 お問合せ:ミューズチケットカウンター TEL (04)2998-7777

オーチャード定期

Bunkamura オーチャードホール

4/20 回 **3:30pm**

指揮: パーヴォ・ヤルヴィ ピアノ: ベンジャミン・グローヴナー (プリテン)、松田華音 (ストラヴィンスキー)
ストラヴィンスキー / バレエ音楽「ペトルーシカ」(全曲 / 1947年版)
プリテン / ピアノ協奏曲 作品13
プロコフィエフ / 交響組曲「3つのオレンジへの恋」作品33bis

7/6 回 **3:30pm**

指揮: 川瀬賢太郎 バンドネオン: 三浦一馬
マルケス / ダンソン 第2番
ピアソラ / バンドネオン協奏曲「アコンカグア」
ヒナステラ / バレエ組曲「エスタンシア」作品8a
バーンスタイン / 「ウエスト・サイド・ストーリー」からシンフォニック・ダンス

主催・お問合せ: Bunkamura TEL (03) 3477-3244

海外公演

ヨーロッパ公演2025 | 指揮：ファビオ・ルイーゼ (NHK交響楽団 首席指揮者)

プログラムA	マーラー／交響曲 第3番 二短調	メゾ・ソプラノ:オレシア・ペトロヴァ 女声合唱:オランダ放送合唱団 児童合唱:オランダ児童合唱団
プログラムB	マーラー／歌曲集「こどもの不思議な角笛」から* マーラー／交響曲 第4番 ト長調 **	バリトン:マティアス・ゲルネ* ソプラノ:イン・ファン**
プログラムC	グリーク／ピアノ協奏曲 イ短調 作品16 マーラー／交響曲 第4番 ト長調 *	ピアノ:ルドルフ・ブフビンダー ソプラノ:イン・ファン*
プログラムD	武満 徹／3つの映画音楽 ベルク／ヴァイオリン協奏曲 ブラームス／交響曲 第4番 ホ短調 作品98	ヴァイオリン:諏訪内晶子
プログラムE	ハイドン／チェロ協奏曲 第1番 ハ長調 Hob. VIIb-1 マーラー／交響曲 第4番 ト長調 *	チェロ:ヤン・フォグラール ソプラノ:イン・ファン*

2025 5/9金 8:00pm	アントワープ(ベルギー)	エリーザベト王妃ホール[プログラムC]
5/11日 8:15pm	アムステルダム(オランダ) 「マーラー・フェスティバル2025」参加公演	コンセルトヘボウ 大ホール[プログラムA]
5/12日 8:15pm	アムステルダム(オランダ) 「マーラー・フェスティバル2025」参加公演	コンセルトヘボウ 大ホール[プログラムB]
5/14水 7:30pm	ウィーン(オーストリア)	ウィーン・コンツェルトハウス 大ホール[プログラムC]
5/15木 8:00pm	ブラハ(チェコ) 「ブラハの春 音楽祭」参加公演	ルドルフィヌム ドヴォルザーク・ホール[プログラムD]
5/17日 7:30pm	ドレスデン(ドイツ) 「ドレスデン音楽祭」参加公演	聖母教会[プログラムD]
5/18日 6:00pm	ドレスデン(ドイツ) 「ドレスデン音楽祭」参加公演	文化宮殿 コンサートホール[プログラムE]
5/20日 7:30pm	インスブルック(オーストリア)	コンGRESS・インスブルック チロル・ホール[プログラムD]

曲目解説執筆者

太田峰夫(おた みねお)

京都市立芸術大学音楽学部教授。おもな研究領域は20世紀ハンガリー音楽史、とりわけバルトークの音楽。音楽専門誌への寄稿のほか、著書に『バルトーク——音楽のプリミティヴィズム』、共訳書に『バルトーク音楽論選』、論文に「ハンガリーのピアノ」をめぐるナショナリズムとオリエンタリズム——ヨーカイ・モール『年老いる頃に』(1865)における打弦楽器ツィンバロムの表象について——」など。

千葉潤(ちば じゅん)

札幌大谷大学学長。2003年、モスクワ音楽院大学院から芸術学カンディダート(Ph. D)を授与される。専門はロシア音楽。著書に「ショスタコーヴィチ」(作曲家・人と作品シリーズ)、『アリフレド・シュニツケの交響的創作——間テクスト分析の試み』、共編著書に『ロシア音楽事典』、おもな論文に「エディソン・デニーソフ《死は永き眠り》における変奏技法の諸特徴」など。

沼野雄司(ぬまの ゆうじ)

桐朋学園大学音楽学部教授。博士(音楽学)。おもな研究領域は20世紀から21世紀の音楽。著書に『トーキョー・シンコペーション——音楽表現の現在』『音楽学への招待』『現代音楽史——闘争しつづける芸術のゆくえ』『エドガー・ヴァレーズ——孤独な射手の肖像』『ファンダメンタルな楽曲分析入門』『リゲティ、ベリオ、ブーレーズ——前衛の終焉と現代音楽のゆくえ』など。

(五十音順、敬称略)

N響の出演番組

定期公演や特別公演の様子が放送されるほか、大河ドラマのテーマ音楽や「名曲アルバム」の演奏なども行っています。NHKの番組を通じてN響の演奏をお楽しみください。

クラシック音楽館(N響定期公演ほか)

Eテレ 日曜9:00~11:00pm

ベストオブクラシック

FM 7:30~9:10pm

N響演奏会

FM 土曜4:00~5:50pm(不定期)

クラシックTV(クラシック全般の話題を取り上げます)

Eテレ 木曜9:00~9:30pm

月曜2:00~2:30pm(再放送)

これらの番組は放送終了後も「NHKプラス」(テレビ)や「らじる★らじる」(ラジオ)で1週間何度でもご視聴いただけます。出演番組について、詳しくはNHKやN響のホームページをご覧ください。

Information

篠崎史紀 特別コンサートマスター 退任のお知らせ



1997年4月より「コンサートマスター」、2000年4月より「第1コンサートマスター」、現在は「特別コンサートマスター」を務め、N響の顔として長年活躍してきた篠崎史紀は、2025年3月末をもって特別コンサートマスターを退任し、N響を退団することになりましたのでお知らせいたします。
退任までに篠崎が出演するN響公演は下記の通りです。

篠崎史紀 今後の出演公演

[N響主催の定期公演]

1/24(金)、25(土)2025年1月定期公演Cプログラム

[各地の公演]

2/26(水)市川、27(木)和歌山、3/1(土)高知、2(日)高松、3(月)直方、
11(火)すみだトリフォニーホール(錦糸町)

※「各地の公演」の詳細は33～35ページでご確認ください。

篠崎史紀からのメッセージ

振り返れば、N響にコンサートマスターとして入団してから四半世紀が経っていました。それぞれの演奏会に素敵な出会いがあり、ときに別れもありました。その1つひとつがかけがえない思い出として今思い起こされます。コンサートを通して、みなさまと共有できた感動の日々に心より感謝申し上げます。

まもなくN響は記念すべき1世紀という節目を迎えます。N響は今日、世界中の音楽ファンから期待を一身に背負い、未来を囑望されるオーケストラへと躍進しました。これも、お客さまのお力添えのおかげだと思っています。

音楽の真髄は「再生と伝承」です。各々の演奏会で数多くのドラマを生み出してきた音楽は、人類が創造した最高のコミュニケーションツールだと感じています。これは未来永劫、N響に受け継がれていくことでしょう。

そして、私自身も次世代のため「良き地球人」を目指し、みなさまと一緒にこのN響を応援していきたいと思っています。本当にありがとうございました。

新入団

チェロ 藤森洸一(ふじもり こういち)2025年1月1日付で入団。

チェロ 矢部優典(やべ ゆうすけ)2025年1月1日付で入団。

指揮研究員の交代について

平石章人、湯川紘恵の2人は2024年12月31日をもって指揮研究員の期間を満了しました。2025年1月1日より新たに井手奏(いで かな)、佐久山修太(さくやま しゅうた)の2人が指揮研究員に就きました。「指揮研究員」は、有望な若手指揮者をオーケストラの現場に迎え入れ、国内外の巨匠たちとの音楽づくりに携わる機会を提供する制度で、日本のクラシック音楽界を担う人材を数多く輩出しています。

訃報

当団元ホルン奏者(1973年10月入団)で団友の山本真(やまもと まこと)氏が、2024年12月22日に逝去されました。享年76。ここに謹んで哀悼の意を表します。

お詫びと訂正

本誌「Philharmony」2024年12月号にて誤りがありました。
お詫び申し上げますとともに、以下の通り訂正をさせていただきます。

12頁R. シュトラウスの楽器編成[あすの朝]

[誤] ヴァイオリン以外の弦楽

[正] 弦楽

特別支援・特別協力・賛助会員

Corporate Membership

特別支援

岩谷産業株式会社	代表取締役社長 間島 寛
三菱地所株式会社	執行役社長 中島 篤
株式会社 みずほ銀行	頭取 加藤勝彦
公益財団法人 渋谷育英会	理事長 小丸成洋
東日本旅客鉄道株式会社	代表取締役社長 喜勢陽一
東日本電信電話株式会社	代表取締役社長 澁谷直樹
東京海上ホールディングス株式会社	取締役社長 グループCEO 小宮 暁
株式会社ポケモン	代表取締役社長 石原恒和

特別協力

BMW ジャパン	代表取締役社長 長谷川正敏
全日本空輸株式会社	代表取締役社長 井上慎一
ヤマハ株式会社	代表執行役社長 山浦 敦
びあ株式会社	代表取締役社長 矢内 廣

賛助会員

・ 常陸宮	・ 有限責任 あずさ監査法人 理事長 山田裕行	・ (株)インターネットイニシアティブ 代表取締役会長 鈴木幸一
・ (株)アートレイ 代表取締役 小森活美	・ アットホーム(株) 代表取締役社長 鶴森康史	・ 内 聖美
・ (株)アイシン 取締役社長 吉田守孝	・ イーソリューションズ(株) 代表取締役社長 佐々木経世	・ 内山貴史
・ (株)アインホールディングス 代表取締役社長 大谷喜一	・ EY新日本有限責任監査法人 理事長 片倉正美	・ SMBC日興証券(株) 代表取締役社長 吉岡秀二
・ 葵設備工事(株) 代表取締役社長 安藤正明	・ (株)井口一世 代表取締役 井口一世	・ SCSK(株) 代表取締役 執行役員 社長 當麻隆昭
・ (株)あ佳音 代表取締役社長 遠山信之	・ 池上通信機(株) 代表取締役社長 清森洋祐	・ (株)NHKアート 代表取締役社長 平田恭佐
・ AXLBIT(株) 代表取締役 長谷川章博	・ (一財)ITOH 代表理事 伊東忠俊	・ NHK 営業サービス(株) 代表取締役社長 手島一宏
・ アサヒグループホールディングス(株) 代表取締役社長兼CEO 勝木敦志	・ 井村屋グループ(株) 取締役社長 大西安樹	・ (株)NHK エデュケーショナル 代表取締役社長 荒木美弥子
・ (株)朝日工業社 代表取締役社長 高須康有	・ (有)IL VIOLINO MAGICO 代表取締役 山下智之	・ (株)NHK エンタープライズ 代表取締役社長 有吉伸人
・ 朝日信用金庫 理事長 伊藤康博		・ (学)NHK 学園 理事長 等々力 健

- ・(株)NHK グローバルメディアサービス
代表取締役社長 | 神田真介
- ・(株)NHK出版
代表取締役社長 | 江口貴之
- ・(株)NHK テクノロジーズ
代表取締役社長 | 山口太一
- ・(株)NHK ビジネスクリエイティブ
代表取締役社長 | 石原 勉
- ・(株)NHK プロモーション
代表取締役社長 | 有吉伸人
- ・(株)NTTドコモ
代表取締役社長 | 前田義晃
- ・(株)NTTファンリテーズ
代表取締役社長 | 松原和彦
- ・ENEOS ホールディングス(株)
代表取締役 社長執行役員 | 宮田知秀
- ・荏原冷熱システム(株)
代表取締役 | 加藤恭一
- ・MN インターファッション(株)
代表取締役社長 | 吉本一心
- ・(株)エルトク
代表取締役 | 間部恵造
- ・大崎電気工業(株)
代表取締役会長 | 渡辺佳英
- ・大塚ホールディングス(株)
代表取締役社長兼CEO | 井上 真
- ・(株)大林組
代表取締役社長 | 蓮輪賢治
- ・オールニッポンヘリコプター(株)
代表取締役社長 | 寺田 博
- ・岡崎悦子
- ・岡崎耕治
- ・小田急電鉄(株)
取締役社長 | 鈴木 滋
- ・陰山建設(株)
代表取締役 | 陰山正弘
- ・カシオ計算機(株)
代表取締役社長CEO
増田裕一
- ・鹿島建設(株)
代表取締役社長 | 天野裕正
- ・(株)加藤電気工業所
代表取締役 | 加藤浩章
- ・(株)金子製作所
代表取締役 | 金子晴房
- ・カルチャー・エンタテインメント(株)
代表取締役 社長執行役員 | 中西一雄

- ・(株)関電工
取締役社長 | 仲摩俊男
- ・(株)かんぼ生命保険
取締役兼代表執行役社長 | 谷垣邦夫
- ・キッコーマン(株)
代表取締役社長CEO | 中野祥三郎
- ・(株)CURIOUS PRODUCTIONS
代表取締役 | 黒川幸太郎
- ・(株)教育芸術社
代表取締役 | 市川かおり
- ・(株)共栄サービス
代表取締役 | 半沢治久
- ・(株)共同通信会館
代表取締役専務 | 梅野 修
- ・(一社)共同通信社
社長 | 水谷 亨
- ・キリンホールディングス(株)
代表取締役会長CEO | 磯崎功典
- ・(学)国立音楽大学
理事長 | 重盛次正
- ・京王電鉄(株)
代表取締役社長 社長執行役員
都村智史
- ・京成電鉄(株)
代表取締役社長 社長執行役員
小林敏也
- ・KDDI(株)
代表取締役社長 | 高橋 誠
- ・(医)社団 恒仁会
理事長 | 伊藤恒道
- ・(株)構造計画研究所ホールディングス
代表執行役 | 服部正太
- ・(株)コーポレートディレクション
代表取締役 | 小川達大
- ・小林弘侑
- ・佐川印刷(株)
代表取締役会長 | 木下宗昭
- ・佐藤弘康
- ・サフラン電機(株)
代表取締役 | 藤崎貴之
- ・(株)サンセイ
代表取締役 | 富田佳佑
- ・サントリーホールディングス(株)
代表取締役社長 | 新浪剛史
- ・(株)ジェイ・ウィル・コーポレーション
代表取締役社長 | 佐藤雅典
- ・JCOM(株)
代表取締役社長 | 岩木陽一

- ・(株)シグマクシス・ホールディングス
会長 | 富村隆一
- ・(株)ジャパン・アーツ
代表取締役社長 | 二瓶純一
- ・(株)集英社
代表取締役社長 | 廣野真一
- ・(株)小学館
代表取締役社長 | 相賀信宏
- ・(株)商工組合中央金庫
代表取締役社長 | 関根正裕
- ・庄司勇次朗・恵子
- ・ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
- ・(株)白川プロ
代表取締役 | 白川亜弥
- ・(有)新赤坂健康管理協会
代表取締役社長 | 小池 学
- ・信越化学工業(株)
代表取締役社長 | 斉藤恭彦
- ・新菱冷熱工業(株)
代表取締役社長 | 加賀美 猛
- ・(株)スカパーJSAT ホールディングス
代表取締役社長 | 米倉英一
- ・(株)菅原
代表取締役 会長兼社長 | 古江訓雄
- ・スズキ(株)
代表取締役社長 | 鈴木俊宏
- ・住友商事(株)
代表取締役 社長執行役員 CEO
上野真吾
- ・住友電気工業(株)
社長 | 井上 治
- ・セイコーグループ(株)
代表取締役会長兼グループCEO
兼グループCCO | 服部真二
- ・聖徳大学
理事長・学長 | 川並弘純
- ・西武鉄道(株)
代表取締役社長 | 小川周一郎
- ・清和綜合建物(株)
代表取締役社長 | 大串桂一郎
- ・関閩商事(株)
代表取締役会長 | 関 正夫
- ・(株)セノン
代表取締役社長 | 澤本 泉
- ・(株)ソニー・ミュージックエンタテインメント
代表取締役社長CEO | 村松俊亮

- ・損害保険ジャパン(株)
取締役社長 | 石川耕治
- ・第一三共(株)
代表取締役会長兼CEO | 眞鍋 淳
- ・第一生命保険(株)
代表取締役社長 | 隅野俊亮
- ・大成建設(株)
代表取締役社長 | 相川善郎
- ・大日コーポレーション(株)
代表取締役社長兼グループCEO
鈴木忠明
- ・高砂熱学工業(株)
代表取締役社長 | 小島和人
- ・(株)ダク
代表取締役 | 福田浩二
- ・(株)竹中工務店
取締役執行役員社長 | 佐々木正人
- ・田中貴金属工業(株)
代表取締役社長執行役員
田中浩一朗
- ・田原 昇
- ・チャンネル銀河(株)
代表取締役社長 | 前田鎮男
- ・中央日本土地建物グループ(株)
代表取締役社長 | 三宅 潔
- ・中外製薬(株)
代表取締役社長 | 奥田 修
- ・(株)電通
代表取締役社長執行役員 | 佐野 傑
- ・(株)テンポプリモ
代表取締役 | 中村聡武
- ・東海東京フィナンシャル・ホールディングス(株)
代表取締役会長 | 石田建昭
- ・東海旅客鉄道(株)
代表取締役社長 | 丹羽俊介
- ・東急(株)
取締役社長 社長執行役員 | 堀江正博
- ・(株)東急コミュニティー
代表取締役社長 | 木村昌平
- ・(株)東急文化村
代表取締役 | 嶋田 創
- ・(株)東京交通会館
取締役社長 | 興野敦郎
- ・東信地所(株)
代表取締役 | 堀川利通
- ・東武鉄道(株)
取締役社長 | 都築 豊

- ・桐朋学園大学
学長 | 辰巳明子
- ・(株)東北新社
代表取締役社長 | 小坂恵一
- ・鳥取末広座(株)
代表取締役 | 西川八重子
- ・(一財)凸版印刷三幸会
代表理事 | 金子眞吾
- ・トヨタ自動車(株)
代表取締役社長 | 佐藤恒治
- ・内外施設工業グループホールディングス(株)
代表取締役社長 | 林 克昌
- ・中銀グループ
代表 | 渡辺蔵人
- ・中本光子
- ・日興アセットマネジメント(株)
会長 | 西田 豊
- ・日鉄興和不動産(株)
代表取締役社長 | 三輪正浩
- ・日東紡績(株)
取締役 代表取締役会長 | 辻 裕一
- ・(株)日本アーティスト
代表取締役 | 幡野菜穂子
- ・日本ガイシ(株)
取締役社長 | 小林 茂
- ・(株)日本カストディ銀行
代表取締役社長 | 土屋正裕
- ・(株)日本国際放送
代表取締役社長 | 高尾 潤
- ・日本たばこ産業(株)
代表取締役社長 | 寺嶋正道
- ・日本運通(株)
代表取締役社長 | 竹添進二郎
- ・日本電気(株)
取締役 代表取締役社長兼CEO
森田隆之
- ・日本BCP(株)
代表取締役社長 | 角谷育則
- ・(一財)日本放送協会共済会
理事長 | 竹添賢一
- ・日本みらいホールディングス(株)
代表取締役社長 | 安嶋 明
- ・日本郵政(株)
取締役兼代表取締役社長 | 増田寛也
- ・(株)ニトリホールディングス
代表取締役会長兼CEO | 似鳥昭雄

- ・(株)ニフコ
代表取締役社長 | 柴尾雅春
- ・野田浩一
- ・野村ホールディングス(株)
代表執行役社長 | 奥田健太郎
- ・パナソニック ホールディングス(株)
代表取締役社長執行役員 グループCEO
楠見雄規
- ・(株)原田武夫国際戦略情報研究所
代表取締役 | 原田武夫
- ・(有)パルフェ
代表取締役 | 伊藤良彦
- ・ぴあ(株)
代表取締役社長 | 矢内 廣
- ・(株)フォトロン
代表取締役 | 瀧水 隆
- ・福田三千男
- ・富士通(株)
代表取締役社長 | 時田隆仁
- ・富士通フロンテック(株)
代表取締役社長 | 渡部広史
- ・古川宣一
- ・ペプテドリーム(株)
代表取締役社長CEO | リード・バトリック
- ・(株)朋栄ホールディングス
代表取締役 | 清原克明
- ・(株)放送衛星システム
代表取締役社長 | 角 英夫
- ・(公財)放送文化基金
理事長 | 濱田純一
- ・ホクト(株)
代表取締役 | 水野雅義
- ・ボラリス・キャピタル・グループ(株)
代表取締役社長 | 木村雄治
- ・前田工織(株)
代表取締役社長 | 前田尚宏
- ・牧 寛之
- ・町田優子
- ・丸紅(株)
代表取締役社長 | 柿木真澄
- ・溝江建設(株)
代表取締役社長 | 溝江 弘
- ・三井住友海上火災保険(株)
代表取締役 | 舩曳真一郎
- ・(株)三井住友銀行
頭取 | 福留朗裕

- ・三井住友信託銀行(株)
取締役社長 | 大山西也
- ・三菱商事(株)
代表取締役社長 | 中西勝也
- ・(株)緑山スタジオ・シティ
代表取締役社長 | 永田周太郎
- ・三橋産業(株)
代表取締役会長 | 三橋洋之
- ・三橋洋之
- ・三原穂積
- ・(株)ミロク情報サービス
代表取締役社長 | 是枝周樹
- ・(学)武蔵野音楽学園 武蔵野音楽大学
理事長 | 福井直敬
- ・(株)明治
代表取締役社長 | 松田克也
- ・(株)明電舎
代表取締役 執行役員社長 | 井上晃夫
- ・メットライフ生命保険(株)
代表取締役 会長 社長 最高経営責任者
ディルク・オステイン
- ・(株)目の眼
社主 | 櫻井 恵
- ・森ビル(株)
代表取締役社長 | 辻 慎吾
- ・森平舞台機構(株)
代表取締役 | 森 健輔
- ・山田産業(株)
代表取締役 | 山田裕幸
- ・(株)ヤマハミュージックジャパン
代表取締役社長 | 松岡祐治
- ・ユニオンツール(株)
代表取締役会長 | 片山貴雄
- ・米澤文彦
- ・(株)読売広告社
代表取締役社長 | 菊地英之
- ・(株)読売旅行
代表取締役社長 | 貞田貴志
- ・リコージャパン(株)
代表取締役 社長執行役員 CEO
笠井 徹
- ・料亭 三長
代表 | 高橋千善
- ・(株)リンレイ
代表取締役社長 | 鈴木信也
- ・(有)ルナ・エンタープライズ
代表取締役 | 戸張誠二
- ・ローム(株)
代表取締役社長 社長執行役員
松本 功
- ・YKアクロス(株)
代表取締役社長 | 田淵浩記
- ・YCC(株)
社長 | 中山武之

(五十音順、敬称略)

NHK交響楽団への ご寄付について

NHK交響楽団は多くの方々の貴重なご寄付に支えられて、積極的な演奏活動を展開しております。定期公演の充実をはじめ、著名な指揮者・演奏家の招聘、意欲あふれる特別演奏会の実現、海外公演の実施など、今後も音楽文化の向上に努めてまいりますので、みなさまのご支援をよろしくお願い申し上げます。

「賛助会員」入会のご案内

NHK交響楽団は賛助会員制度を設け、上記の方々にご支援をいただいております。当団の経営基盤を支える大きな柱となっております。会員制度の内容は次の通りです。

■当団は「公益財団法人」として認定されています。

当団は芸術の普及向上を行うことを主目的とする法人として「公益財団法人」の認定を受けているため、当団に対する寄付金は税制上の優遇措置の対象となります。

1. 会費：一口50万円(年間)
2. 期間：入会は随時、年会費をお支払いいただいたときから1年間
3. 入会の特典：『フィルハーモニー』、『年間パンフレット』、『第9』演奏会プログラム等にご芳名を記載させていただきます。

N響主催公演のご鑑賞や会場リハーサル見学の機会を設けます。

遺贈のご案内

資産の遺贈(遺言による寄付)を希望される方々のご便宜をお図りするために、NHK交響楽団では信託銀行が提案する「遺言信託制度」をご紹介します(三井住友信託銀行と提携)。相続財産目録の作成から遺産分割手続の実施まで、煩雑な相続手続を信託銀行が有償で代行いたします。まずはN響寄付担当係へご相談ください。

お問い合わせ

公益財団法人 NHK交響楽団「寄付担当係」

TEL：03-5793-8120

みなさまの声をお聞かせください！

インターネットアンケートにご協力ください

ご鑑賞いただいた公演のご感想や、N響の活動に対するみなさまのご意見を、ぜひお寄せください。
ご協力をお願いいたします。

アクセス方法

STEP

1



スマートフォンで右の
QRコードを読み取る。
またはURLを入力
[https://www.nhkso.or.jp/
enquete.html](https://www.nhkso.or.jp/enquete.html)



STEP

2



開いたリンク先からアンケートサイトに入る

STEP

3



アンケートに答えて(約5分)、
「送信」を押して完了！

ほかにもご意見・ご感想がありましたらお寄せください。

定期公演会場の主催者受付にお持ちいただくか、

〒108-0074東京都港区高輪2-16-49 NHK交響楽団 フィルハーモニー編集までお送りください。

ふりがな		年齢	歳
お名前		TEL	

個人情報の取り扱いについて

ご提供いただいた個人情報は、必要な場合、ご記入者様への連絡のみに使用し、他の目的に使用いたしません。

NHK SYMPHONY ORCHESTRA, TOKYO

Chief Conductor: Fabio Luisi

Music Director Emeritus: Charles Dutoit

Honorary Conductor Laureate: Herbert Blomstedt

Conductor Laureate: Vladimir Ashkenazy

Honorary Conductor: Paavo Järvi

Permanent Conductors: Tadaaki Otaka, Tatsuya Shimonon

Specially Appointed Concertmaster: Fuminori Maro Shinozaki

First Concertmaster: Sunao Goko

Guest Concertmaster: Yosuke Kawasaki

1st Violins

- Shirabe Aoki
- Ayumu Iizuka
- Kyoko Une
- Yuki Oshika
- Ryota Kuratomi
- Ko Goto
- Tamaki Kobayashi
- Toshihiro Takai
- Taiga Tojo
- Yuki Naoi
- Yumiko Nakamura
- Takao Furihata
- Hiroyuki Matsuda
- Haruhiko Mimata
- Nana Miyagawa
- Tsumotomu Yamagishi
- Koichi Yokomizo

2nd Violins

- ◎ Rintaro Omiya
- ◎ Masahiro Morita
- Toshiyuki Kimata
- Maiko Saito
- Keiko Shimada
- Atsushi Shirai
- Akiko Tanaka
- Kirara Tsuboi
- Yosuke Niwa
- Kazuhiko Hirano
- Yoko Funaki
- Kenji Matano
- Ryuto Murao
- Masaya Yazu
- Yoshikazu Yamada
- Masamichi Yokoshima
- Toshiro Yokoyama
- Yuka Yoneda

* Yui Yuhara

Violas

- ◎ Ryo Sasaki
- ◎ Junichiro Murakami
- ☆ Shotaro Nakamura
- Satoshi Ono
- Shigetaka Obata
- * Eri Kuribayashi
- Gentaro Sakaguchi
- Mayumi Taniguchi
- Hiroto Tobisawa
- Hironori Nakamura
- Naoyuki Matsui
- Rachel Yui Mikumi
- # Yuya Minorikawa
- Ryo Muramatsu

Cellos

- ◎ Rei Tsujimoto
- ◎ Ryoichi Fujimori
- Hiroya Ichi
- Yukinori Kobatake
- Miho Naka
- Ken'ichi Nishiyama
- Shunsuke Fujimura
- Koichi Fujimori
- Hiroshi Miyasaka
- Yuki Murai
- Yusuke Yabe
- Shunsuke Yamanouchi
- Masako Watanabe

Contrabasses

- ◎ Shu Yoshida
- Masanori Ichikawa
- Eiji Inagawa
- Jun Okamoto
- Takashi Konno
- Shinji Nishiyama
- Tatsuro Honma
- Yoko Yanai

Flutes

- ◎ Masayuki Kai
- ◎ Hiroaki Kanda
- Maho Kajikawa
- # Junji Nakamura

Oboes

- ◎ Yumi Yoshimura
- Shoko Ikeda
- Izumi Tsuboike
- Hitoshi Wakui

Clarinets

- ◎ Kei Ito
- ◎ Kenji Matsumoto
- Takashi Yamane

Bassoons

- ◎ Hironori Ugajin
- ◎ Kazusa Mizutani
- * Shusuke Ouchi
- Yuki Sato
- Itaru Morita

Horns

- ◎ Hitoshi Imai
- Naoki Ishiyama
- Yasushi Katsumata
- Hiroshi Kigawa
- Yudai Shoji
- Kazuko Nomiyama

Trumpets

- ◎ Kazuaki Kikumoto
- ◎ Tomoyuki Hasegawa
- Tomoki Ando
- * Kotaro Fujii
- Eiji Yamamoto

Trombones

- ◎ Hikaru Koga
- ◎ Mikio Nitta
- Ko Ikegami
- Hiroyuki Kurogane
- Takenori Yoshikawa

Tuba

- Yukihiro Ikeda

Timpani

- ◎ Toru Uematsu
- ◎ Shoichi Kubo

Percussion

- Tatsuya Ishikawa
- Hidemi Kuroda
- Satoshi Takeshima

Harp

- Risako Hayakawa

Stage Manager

- Masaya Tokunaga

Librarian

- Akane Oki
- Hideyo Kimura

(◎ Principal, ☆ Acting Principal, ○ Vice Principal, □ Acting Vice Principal, # Inspector, * Intern)

PROGRAM

A**Concert No. 2028****NHK Hall****January****18 (Sat) 6:00pm****19 (Sun) 2:00pm**

conductor**Tugan Sokhiev****concertmaster****Sunao Goko**

The 50th Anniversary of Dmitry Shostakovich's Death**Dmitry Shostakovich****Symphony No. 7 C Major Op. 60,*****Leningrad* [73']**

I Allegretto

II Moderato (poco allegretto)

III Adagio

IV Allegro non troppo

- This concert will be performed with no intermission.

- All performance durations are approximate.

Artist Profile

Tugan Sokhiev, conductor

In 2025, the NHK Symphony Orchestra will again start the year under the baton of Tugan Sokhiev. Since 2008, he has been continuously making guest appearances, and has been unfolding a variety of musical adventures based on an extremely close relationship of trust with the orchestra. He resigned the position of Music Director of both the Bolshoi Theatre and the Orchestre national du Capitole de Toulouse in the

spring of 2022, and it was in January 2023 when he stood on the podium of the NHK Symphony Orchestra after an absence of three years, and then, in January 2024, he vividly presented three completely different programs of French, Russian and German repertoire with the orchestra.

Tugan Sokhiev, who is in his 40s, continues to strive energetically in concerts and operas. He was born in 1977 in Vladikavkaz in North Ossetia of the former Soviet Union, and studied conducting with Ilya Musin and Yuri Temirkanov at the St. Petersburg Conservatory. He excels

in expressing passion and dynamism in Russian repertoire, and the sophisticated nature and colors particular to French music, but also he is masterly in demonstrating the meticulous structure of German and Austrian repertoire as he served as Principal Conductor of the Deutsches Symphonie-Orchester Berlin in the 2010s. He has also visited Japan with the Wiener Philharmoniker in November 2023, and the Münchner Philharmoniker in November 2024.

He continues to conduct three programs this season. Placing the composers he has worked with the NHK Symphony Orchestra until now as the core, works by Mussorgsky and Stravinsky are performed for the first time. He also features Russian and east European composers, but will finally work on Brahms' Symphony No.1, the work which had to be cancelled during the pandemic. We will enjoy an intense and exciting opening of the new year.

[Tugan Sokhiev by Takaakira Aosawa, music critic]

Program Note | Kumiko Nishi

Dmitry Shostakovich (1906–1975)

Symphony No. 7 C Major Op. 60, *Leningrad*

Born eleven years before the Russian Empire ceased to exist, Shostakovich lived mostly as a Soviet citizen. He composed his all fifteen symphonies behind the Iron Curtain, while many compatriot musicians such as Rachmaninov and Stravinsky fled to (or decided to stay in) the West after the 1917 Revolution.

Saint Petersburg where Shostakovich was born and bred was the Russian Empire's capital for about two hundred years before the new Soviet regime relocated the capital to Moscow. In 1924 when Shostakovich was in late teens, his birthplace was renamed Leningrad after the death of Vladimir Lenin. It was to retain that name until the collapse of the USSR. During World War II, the city suffered heavy casualties while enduring the 872-day destructive Siege of Leningrad by Hitler's troops (September 1941 – January 1944), which made the city a symbol of anti-Nazi resistance for the Allies. And it was mainly in besieged Leningrad that Shostakovich, driven by his love for his hometown, penned the Symphony No. 7 from July to December in 1941 (Germany's surprise invasion of the Soviet Union had started in June). The world premiere took place the next year in Kuybyshev (now Samara) where Shostakovich had evacuated to: the concert was radio broadcasted across the Soviet Union for a boost in patriotic fighting spirit. The subsequent European and American premieres in 1942 were both greeted with loud cheers.

A few weeks earlier than the world premiere of No. 7, a rehearsal report by the novelist Alexei Tolstoy appeared in the Soviet Communist Party's official newspaper, *Pravda*. It had prepared the first listeners to accept the symphony as the Russians' combat and triumph against the fascism. Some recent sources, however, suggest that Shostakovich resisted by stealth all sorts of totalitarianism including Stalinism in this monumental work.

No. 7 calls for a colossal orchestra with a banda (an additional brass section). It is cast in four movements that Shostakovich originally entitled "War," "Reminiscence," "Our Country's Expanses" and "Victory" respectively. The opening movement introduces the brave

first theme in C major and the peaceable second theme in G major following the Classical sonata form. Then a surprise comes: a new element, well-known as the “invasion theme,” is restated multiple times over a snare drum’s monotonously-repeated rhythm pattern evoking Ravel’s *Bolero* (1928). A dramatic gradual increase in volume leads this development section to a ferocious climax. The Second movement in B minor is an idyllic scherzo, while the third movement in D major is a slow lyrical one reminiscent of the Baroque era. And without a break, the finale begins in C minor with the string crooning with a slight sentiment. The symphony is concluded in C major by the whole orchestra crying out loudly the brave first theme from the opening movement as if to come full circle, to affirm an overwhelming victory.

A

18 & 19, JAN, 2025

Kumiko Nishi

English-French-Japanese translator based in the USA. Holds a MA in musicology from the University of Lyon II, France and a BA from the Tokyo University of the Arts (Geidai).

B

Concert No.2030

Suntory Hall

January

30 (Thu) 7:00pm

31 (Fri) 7:00pm

conductor Tugan Sokhiev | for a profile of Tugan Sokhiev, see p. 46

violin Sunao Goko

concertmaster Kota Nagahara♦

◆ **Kota Nagahara:** Born in Hiroshima, Kota Nagahara started learning the violin at the age of five, and worked with the Tokyo Symphony Orchestra at the age of twelve. He studied at Tokyo University of the Arts, and at the Juilliard School in New York. He has worked with many of the world's renowned conductors such as Seiji Ozawa, and has won the trust of Riccardo Muti, with whom he works every year at the Spring Festival in Tokyo. He performs as concert soloist as well as in chamber music and served as the concertmaster of the Yomiuri Nippon Symphony Orcehstra from 2014 to 2024.

**Modest Mussorgsky /
Anatoly Liadov**
The Fair at Sorochyntsi, opera
—*Introduction, Gopak* [8']

Béla Bartók
Violin Concerto No. 2 [35']

- I Allegro non troppo
- II Andante tranquillo
- III Allegro molto

— intermission (20 minutes) —

Antonín Dvořák
Symphony No. 8 G Major Op. 88
[34']

- I Allegro con brio
- II Adagio
- III Allegretto grazioso
- IV Allegro ma non troppo

- All performance durations are approximate.

Artist Profile

Sunao Goko, violin



Sunao Goko, who won the Tibor Varga International Violin Competition, as well as the Audience Award and Contemporary Music Award in 2013, is one of the young violinists attracting the most attention both at home and abroad.

He was born in Tagajo-City, Miyagi Prefecture in 1993, and won 1st prize in the 11th Yehudi Menuhin International Competition for Young

Violinists (the youngest winner in the competition's history) in 2006. Since his debut in December 2007, he has worked with leading Japanese orchestras under the batons of Gerhard Bosse, François-Xavier Roth, Kazuyoshi Akiyama, Michiyoshi Inoue, Tatsuya Shimono, Kazuki Yamada and Kentaro Kawase. Over three years beginning 2017 he worked on a series to perform the complete Beethoven violin sonatas. He plays a 1682 Stradivarius 'Banat' which has been kindly on loan to him by a courtesy of a private owner. He won the 29th Idemitsu Music Award in 2019.

After serving as Guest Concertmaster of the NHK Symphony Orchestra, he has assumed the position of 1st Concertmaster of the orchestra in April 2024, at the same time, he often appears with the orchestra as a soloist, and in fact in the January 2024 Subscription Concert, he was a solo violinist for Mozart's Sinfonia Concertante for Violin and Viola under the baton of Tugan Sokhiev.

Program Notes | Kumiko Nishi

Modest Mussorgsky (1839–1881) / Anatoly Liadov (1855–1914)

The Fair at Sorochyntsi, opera—Introduction, Gopak

During the second half of the 19th century, the classical music world saw an increasing momentum toward patriotism. Composers from Northern and Eastern Europe, Spain and Russia proudly drew inspiration from their people's folk music, folktales, nature, history and so forth. And the Russian composer Mussorgsky, a member of Saint-Petersburg-based circle The Mighty Handful (The Five), took an active role in the trend.

Mussorgsky is considered today a pioneer of musical modernism who influenced Debussy (1862–1918), but the former, a mostly-self-taught Sunday composer, had been underestimated in his lifetime. He died in poverty leaving some uncompleted works including the comic opera *The Fair at Sorochyntsi* based on a tale by the Ukrainian writer Nikolai Gogol. Mussorgsky began to conceive the libretto in 1874, to create a new opera for the Ukrainian bass Osip Petrov (1806–1878) who brilliantly sang as Varlaam in a performance of the composer's opera *Boris Godunov* the previous year. The preparation of the libretto and the composition were suspended several times before Mussorgsky's death in 1881, mainly due to his struggle to set the Ukrainian speech patterns to music, his other ongoing compositions and Petrov's passing. During today's concert, the extracted two pieces will be performed with the posthumous orchestration by the Russian composer Anatoly Liadov, Rimsky-Korsakov's pupil.

Set in the Ukrainian village Sorochyntsi (Gogol's birthplace), the plot features Cherevik, a henpecked husband, and his daughter Parasya. The pastorally tuneful *Introduction: A Hot Day in Little Russia* leads to the opening bustling scene of large fair. *Gopak* is danced at the opera's finale in celebration of Parasya's marriage to a young peasant. The *Gopak* (Hopak) is a lively Ukrainian traditional dance originally performed by the Cossacks.

Violin Concerto No. 2

Hungarian composer Bartók is also regarded as a forefather of ethnomusicologists nowadays: he traveled with wax cylinders in his hand to collect and study innumerable folk songs and dances mainly of Eastern Europe. This research brought richness, uniqueness and consequently modernism to his classical outputs.

The Violin Concerto No. 2 dates from the prime of Bartók's compositional life. Contemporary with his representative piece *Music for Strings, Percussion and Celesta* (1936), the concerto was written in 1937–1938 during his final years in Europe before leaving for good for the United States to protest against the Nazism. It was a work commissioned by the Hungarian violinist Zoltán Székely, a long-term recital partner of Bartók as a pianist.

The concerto takes the Classical three-movement form to Székely's wishes, although on macro- and micro-levels it shows not a few signs of Bartók's original idea of composing a vast set of variations in single movement. Perpetually varying materials is in truth his favorite technique rooted in his familiarity with folk music. The opening movement in sonata form starts with the extended first theme on the solo violin, evoking village fiddlers in Transylvania and verbunkos, a Hungarian dance typically comprising contrastive slow dotted-rhythm section and fast virtuosic section. Bartók famously builds the cheerless second theme, also introduced by the soloist, employing all the twelve notes in octave without any repetition. It was allegedly to show Arnold Schönberg (1874–1951), the inventor of the ground-breaking twelve-tone technique, that “one can use all twelve tones and still remain tonal.” The middle movement has the solo violinist give the tuneful theme at the outset, followed by its six variations of diverse characters. The dancy final movement, again in sonata form, is actually a variation of the opening movement: both the bouncing first theme in waltz time and the calmer twelve-note second theme are variants of the opening movement's fundamental materials. The splendid conclusion with the solo violinist's great panache was added by Bartók at Székely's request after the completion of the composition.

Antonín Dvořák (1841–1904)

Symphony No. 8 G Major Op. 88

Dvořák was born on the outskirts of Prague, Czech then ruled by the Austrian Empire. Having a father who was a butcher-innkeeper and zither player, Dvořák as a boy received violin and vocal lessons at the local school before starting to perform in village band and church. After studying music in Prague, he made a living as a viola player while composing. During the period when he was a member of the orchestra of the newly-opened Provisional Theatre in Prague, he had opportunities to perform under the baton of Bedřich Smetana (1824–1884), a composer considered today to be the father of the Czech nationalist school in music.

The year 1875 was a turning point for Dvořák. The obscure musician in his mid-thirties in need, won the Austrian State Grant for talented young artists for five years in a row starting then. This largely aided him not only financially but also artistically, as Johannes Brahms (1833–1897) who served a jury from the second year spotted Dvořák's ability and originality. The German composer recommended his publisher Simrock issuing works by this promising Czech man who, thanks to that, quickly earned fame throughout Europe with his printed *Slavonic Dances* (inspired by Brahms's *Hungarian Dances*). Among all Dvořák absorbed from

Brahms's oeuvre is the structural and formal coherence, of which the former made the most in his Symphony No. 7 in D minor (1885) of serious and stormy character written after Brahms's Symphony No. 3 (1883).

Dvořák's next Symphony No. 8 in G major (preceding celebrated No. 9 "From the New World") is marked by sunniness, tunefulness and a looser structural design. It is also the symphony where the composer's Bohemian identity vividly comes to the fore. He wrote it swiftly from August to November in 1889 in his summer house surrounded by the beautiful nature at Vysoká in the suburbs of Prague.

No. 8's opening movement in free sonata form has an introductory flute twittering. It leads us to the cheerful first theme on violas and cellos, followed by the slightly melancholic second theme in B minor given by the winds. The English horn, a principal role in the *New World* Symphony, is used only in this movement in a flash but effectively. The next slow movement is often likened to Beethoven's *Pastorale* Symphony No. 6. Its ever-changing atmospheres and the woodwinds' birdsong-like phrases indeed conjure up rural sceneries. The third movement, headed "grazioso (gracefully)," is in the style of waltz rather than scherzo. Starting in 3/8 meter in G minor, it has a spirited G-major coda in 2/4 meter. The finale in G major, opened by the cheery trumpet fanfare, is a set of variations. Stated by the cellos, the theme is derived from the above-mentioned flute twitter heard at the symphony's opening. This balmy theme is followed by the eighteen variations and the festive coda.

Kumiko Nishi

For a profile of Kumiko Nishi, see p. 48

C

Concert No.2029

NHK Hall

January

24 (Fri) 7:00pm

25 (Sat) 2:00pm

conductor

Tugan Sokhiev | for a profile of Tugan Sokhiev, see p. 46

concertmaster

Fuminori Maro Shinozaki

Igor Stravinsky***Pulcinella*, suite [24']**

- I Sinfonia (Overture)
- II Serenata
- III a) Scherzino—b) Allegro—c) Andantino
- IV Tarantella
- V Toccata
- VI Gavotta con due variazioni
- VII Vivo
- VIII a) Minuetto—b) Finale

— intermission (20 minutes) —

Johannes Brahms***Symphony No. 1 C Minor Op. 68***

[45']

- I Un poco sostenuto—Allegro
- II Andante sostenuto
- III Un poco allegretto e grazioso
- IV Adagio—Allegro non troppo, ma con brio

- All performance durations are approximate.

Program Notes | Kumiko Nishi**Igor Stravinsky (1882–1971)*****Pulcinella*, suite**

Born near Saint Petersburg, Russia, Stravinsky was a private composition pupil of Rimsky-Korsakov (1844–1908) while studying law at university. The young man then gained international fame with his three “primitive-style” ballet scores *The Firebird*, *Petrushka* and *The Rite of Spring*. They all were written for the Russian impresario Sergei Diaghilev’s dance company, Ballets Russes, to be premiered in Paris on the eve of World War I. Stravinsky since frequently changed styles—and countries of residence—, after which he is often dubbed “Chameleon.”

With the ballet score *Pulcinella* written in 1919–1920 as a commission from Diaghilev, Stravinsky got a head start in Neo-classicism. This movement spread quickly to revive idioms,

C

24 & 25, JAN. 2025

forms and aesthetics of the past in modern light as a potent antidote against the over-emotional late-Romanticism and the highly progressive atonalism/serialism.

For this ballet premiered in 1920 in Paris, Diaghilev and his dancer Léonide Massine (who was in charge of the scenario and choreography) drew much inspiration from “Commedia dell’arte,” a traditional comedy that originated in 16th-century Italy. In vogue throughout Europe from the 17th century on, this comedy has several archetypal characters including Pulcinella, a clown in white costume with a black mask and crooked nose. In the Diaghilev/Massine version, Pulcinella, a lady-killer, ends up wedding his jealous girlfriend Pimpinella.

Initially, Diaghilev requested Stravinsky to arrange some pieces by the Italian composer Giovanni Battista Pergolesi (1710–1736) for a full orchestra. Diaghilev, to his surprise, received instead an audacious re-creation for a compact orchestra and three singers: spiced up with modern rhythms, meters, harmonies and instrumentation, Stravinsky’s is full of originality and wittiness but also boundless respect for the past. The suite performed today is prepared by Stravinsky himself for an orchestra without vocalists in 1922. Later researchers revealed that some of the pieces he reworked—without knowing it—were actually by a few other 18th-century Italian composers. Domenico Gallo’s Trio Sonatas for Two Violins and Basso Continuo, in particular, assume an important role as the base for the several numbers such as opening noble Sinfonia and rhythmically-gripping Finale.

Johannes Brahms (1833–1897)

Symphony No. 1 C Minor Op. 68

Born in Hamburg, northern Germany, Brahms is one of the Romantic composers who pursued the past the most deeply, relying on forms and compositional techniques of the Classical era led to its heights by Beethoven (1770–1827). Brahms was even fascinated by Renaissance and Baroque music, especially J. S. Bach (1685–1750)’s, and acquired masterly contrapuntal writing. Though criticized for being behind the times by some of his contemporaries, Brahms’s seemingly traditional approach would strongly inspire future generations like Arnold Schönberg (1874–1951) so they could pave the way for modernism in music.

A catalyst for Brahms valuing past musical heritage was piano and music theory education he received from the Hamburg-based renown teacher, pianist and composer Eduard Marxsen (1806–1887), under whom the teenage Brahms developed a great admiration for Bach, Beethoven and other Classical composers. The programs of the first two piano solo recitals Brahms gave in 1848 and 1849 included indeed music of Bach and Beethoven.

Brahms then leaped into fame overnight at age 20, thanks to the glowing praise for him that the composer and critic Robert Schumann (1810–1856) released to the public in 1853. Now a promising composer, Brahms began to gestate his first symphony around 1855. However, he felt extreme pressure to extend the symphonic history, which seemed to be already concluded by Beethoven the giant. Also due to his highly self-critical nature, Brahms completed his No. 1 over twenty years later in 1876, on top of that, he revised it next year after hearing the premiere. Everything comes to those who wait: the conductor Hans von Bülow famously applauded it as “Beethoven’s Tenth.” This work indeed shows the greatest respect for Beethoven’s legacy, at once being a veritable “Brahms’ First” of his own voice.

Although a product of the Romantic era, Brahms’ No. 1 has the almost same instrumentation as Beethoven’s No. 5. The austere introduction opens Brahms’ No. 1, stating the C/C-sharp/D motif over timpani pounding. This chromatic three-note motto would

recur in diverse forms throughout the symphony following Beethoven's meticulous motivic development. The absence of minuet/scherzo movement may surprise listeners familiar with the genre of symphony: here Brahms strikes out in a new direction proposing a brief graceful interlude prior to the last movement. The finale's dark introduction beginning in C minor reaches the C-major "Alphorn melody" blown by horns: from Switzerland, Brahms had sent a birthday card with this melody to his muse Clara (Schumann's wife) penning below it the following words: "High on the mountains, deep in the valleys, I greet you a thousand times!" The ensuing main sonata section could be likened to a hymn to C major, with the lyrical first theme bearing a great resemblance to Beethoven's *An die Freude* (*Ode to Joy*) tune from his Symphony No. 9.

C

24 & 25, JAN. 2025

Kumiko Nishi

For a profile of Kumiko Nishi, see p. 48

The Subscription Concerts Program 2024–25

2025 01	A	Concert No. 2028	The 50th Anniversary of Dmitry Shostakovich's Death Shostakovich Symphony No. 7 C Major Op. 60, <i>Leningrad</i>	Ordinary	Youth	
		January 18 (Sat) 6:00pm 19 (Sun) 2:00pm		S 11,000 S 5,500 A 9,500 A 4,500 B 7,600 B 3,500 C 6,000 C 2,800 D 5,000 D 1,800 E 3,000 E 1,400		
		NHK Hall	Tugan Sokhiev, conductor			
2025 02	B	Concert No. 2030	Mussorgsky / Liadov <i>The Fair at Sorochyntsi</i> , opera— <i>Introduction, Gopak</i> Bartók Violin Concerto No. 2 Dvořák Symphony No. 8 G Major Op. 88	Ordinary	Youth	
		January 30 (Thu) 7:00pm 31 (Fri) 7:00pm		S 12,000 S 6,000 A 10,000 A 5,000 B 8,000 B 4,000 C 6,500 C 3,250 D 5,500 D 2,750		
		Suntory Hall	Sunao Goko (First Concertmaster, NHKSO), violin			
2025 02	C	Concert No. 2029	Stravinsky <i>Pulcinella</i> , suite Brahms Symphony No. 1 C Minor Op. 68	Ordinary	Youth	
		January 24 (Fri) 7:00pm 25 (Sat) 2:00pm		S 11,000 S 5,500 A 9,500 A 4,500 B 7,600 B 3,500 C 6,000 C 2,800 D 5,000 D 1,800 E 3,000 E 1,400		
		NHK Hall	Tugan Sokhiev, conductor			
2025 02	A	Concert No. 2031	Zemlinsky <i>Sinfonietta</i> , Op. 23 R. Strauss Horn Concerto No. 1 E-flat Major Op. 11 Dvořák <i>The Wild Dove</i> , sym. poem Op. 110 Janáček <i>Sinfonietta</i>	Ordinary	Youth	
		February 8 (Sat) 6:00pm 9 (Sun) 2:00pm		S 10,000 S 5,000 A 8,500 A 4,000 B 6,500 B 3,100 C 5,400 C 2,550 D 4,300 D 1,500 E 2,200 E 1,000		
		NHK Hall	Petr Popelka, conductor Radek Baborák, horn			
2025 02	B	Concert No. 2032	Mozart <i>Vado, ma dove?</i> , aria K. 583* Mozart <i>Alma grande e nobil core</i> , aria K. 578* Mozart Symphony No. 25 G Minor K. 183 Mozart <i>Bella mia fiamma, addio—Resta, oh cara</i> , recitative and aria K. 528* Schumann Symphony No. 1 B-flat Major Op. 38, <i>Frühlingssinfonie</i> (<i>Spring Symphony</i>)	Ordinary	Youth	
		February 13 (Thu) 7:00pm 14 (Fri) 7:00pm		S 12,000 S 6,000 A 10,000 A 5,000 B 8,000 B 4,000 C 6,500 C 3,250 D 5,500 D 2,750		
		Suntory Hall	Petr Popelka, conductor Ema Nikolovska, mezzo soprano*			
2025 02	C	Concert No. 2033	Suppè <i>Leichte Kavallerie</i> , operetta— <i>Overture (Light Cavalry)</i> Saint-Saëns Violin Concerto No. 3 B Minor Op. 61 Suppè <i>Dichter und Bauer</i> , operetta— <i>Overture (Poet and Peasant)</i> Offenbach / Rosenthal <i>Gaîté Parisienne</i> , ballet (Excerpts) (<i>Parisian Gaity</i>)	Ordinary	Youth	
		February 21 (Fri) 7:00pm 22 (Sat) 2:00pm		S 10,000 S 5,000 A 8,500 A 4,000 B 6,500 B 3,100 C 5,400 C 2,550 D 4,300 D 1,500 E 2,200 E 1,000		
		NHK Hall	Tatsuya Shimono, conductor Fumiaki Miura, violin			
2025 04	A	Concert No. 2034	Berlioz <i>Harold en Italie</i> , symphony (<i>Harold in Italy</i>)* Prokofiev Symphony No. 4 C Major Op. 112 (Revised Version / 1947)	Ordinary	Youth	
		April 12 (Sat) 6:00pm 13 (Sun) 2:00pm		S 11,000 S 5,500 A 9,500 A 4,500 B 7,600 B 3,500 C 6,000 C 2,800 D 5,000 D 1,800 E 3,000 E 1,400		
		NHK Hall	Paavo Järvi, conductor Antoine Tamestit, viola*			
2025 04	B	Concert No. 2035	Stravinsky <i>Petrushka</i> , ballet (Complete, 1947 Version) Britten Piano Concerto Op. 13 Prokofiev <i>The Love for Three Oranges</i> , symphonic suite Op. 33bis	Ordinary	Youth	
		April 17 (Thu) 7:00pm 18 (Fri) 7:00pm		S 12,000 S 6,000 A 10,000 A 5,000 B 8,000 B 4,000 C 6,500 C 3,250 D 5,500 D 2,750		
		Suntory Hall	Paavo Järvi, conductor Benjamin Grosvenor (Britten), Kanon Matsuda (Stravinsky), piano			
2025 04	C	There will be no subscription concerts of program C in April due to the orchestra's European tour.				

A NHK Hall
Sat. 6:00pm (doors open at 5:00pm)
Sun. 2:00pm (doors open at 1:00pm)

B Suntory Hall
Thu. 7:00pm (doors open at 6:20pm)
Fri. 7:00pm (doors open at 6:20pm)

C NHK Hall
Fri. 7:00pm (doors open at 6:00pm)
Sat. 2:00pm (doors open at 1:00pm)

2025
05

A Concert No. **2036**
April
26 (Sat) 6:00pm
27 (Sun) 2:00pm
– Program A of the May subscription concerts will be held in April.
NHK Hall

The Program Scheduled to be Performed in NHKSO Europe Tour 2025
Mahler Symphony No. 3 D Minor

Fabio Luisi, conductor
Olesya Petrova, mezzo soprano
Tokyo Opera Singers, female chorus
NHK Tokyo Children Chorus, children chorus

Ordinary	Youth
S 15,000	S 7,000
A 12,500	A 6,000
B 10,000	B 5,000
C 8,000	C 4,000
D 6,500	D 3,000
E 4,500	E 2,000

B Concert No. **2037**
May
1 (Thu) 7:00pm
2 (Fri) 7:00pm
Suntory Hall

The Program Scheduled to be Performed in NHKSO Europe Tour 2025
Berg Violin Concerto
Mahler Symphony No. 4 G Major*

Fabio Luisi, conductor
Akiko Suwanai, violin Maki Mori, soprano*

Ordinary	Youth
S 12,000	S 6,000
A 10,000	A 5,000
B 8,000	B 4,000
C 6,500	C 3,250
D 5,500	D 2,750

C Concert No. **2038**
May
30 (Fri) 7:00pm
31 (Sat) 2:00pm
NHK Hall

Schubert *Rosamunde*, overture
Dohnányi *Variations on a Nursery Tune*, Op. 25*
R. Strauss Symphonic Fantasy from *Die Frau ohne Schatten*
(*The Woman without a Shadow*)
R. Strauss Suite from *Der Rosenkavalier* (*The Rose-Bearer*)
Giedrė Šlekytė, conductor
Mao Fujita, piano*

Ordinary	Youth
S 10,000	S 5,000
A 8,500	A 4,000
B 6,500	B 3,100
C 5,400	C 2,550
D 4,300	D 1,500
E 2,200	E 1,000

2025
06

A Concert No. **2039**
June
7 (Sat) 6:00pm
8 (Sun) 2:00pm
NHK Hall

Rimsky-Korsakov *May Night*, opera—Overture
Rakhmaninov *Rhapsody on a Theme of Paganini*, Op. 43*
Tchaikovsky Symphony No. 6 B Minor Op. 74, *Pathétique*

Vladimir Fedoseyev, conductor
Yulianna Avdeeva, piano*

Ordinary	Youth
S 10,000	S 5,000
A 8,500	A 4,000
B 6,500	B 3,100
C 5,400	C 2,550
D 4,300	D 1,500
E 2,200	E 1,000

B Concert No. **2040**
June
12 (Thu) 7:00pm
13 (Fri) 7:00pm
Suntory Hall

Ibert Flute Concerto
Bruckner Symphony No. 6 A Major

Juanjo Mena, conductor
Karl-Heinz Schütz, flute

Ordinary	Youth
S 12,000	S 6,000
A 10,000	A 5,000
B 8,000	B 4,000
C 6,500	C 3,250
D 5,500	D 2,750

C Concert No. **2041**
June
20 (Fri) 7:00pm
21 (Sat) 2:00pm
NHK Hall

Korngold Violin Concerto D Major Op. 35
Mahler Symphony No. 1 D Major, *Titan*

Tarmo Peltokoski, conductor
Daniel Lozakovich, violin

Ordinary	Youth
S 10,000	S 5,000
A 8,500	A 4,000
B 6,500	B 3,100
C 5,400	C 2,550
D 4,300	D 1,500
E 2,200	E 1,000

All performers and programs are subject to change or cancellation depending on the circumstances.

N響関連のお知らせ

いつでもどこでも、NHKの番組を。

NHK+



利用登録はこちらから

<https://plus.nhk.jp/info/>

総合・Eテレの番組を

スマホやタブレット・
パソコン・テレビ^{※1}で
放送から1週間^{※2} 何度でも

お楽しみいただけます！

※1 テレビでは放送し番組配信のみ

※2 特選の番組の一部は延長2週間配信



アプリで便利に！

メールアドレスとパスワードを入力するだけで
すぐに見逃し配信をご覧ください

※放送受信契約のある世帯の方が追加のご負担なく利用できるサービスです

スマホやPCでNHKラジオが楽しめる！

NHK ラジオ らじる★らじる

スマートフォンやパソコンでラジオ第1(R1)・ラジオ第2(R2)・NHK-FMの放送をリアルタイムで聴くことができます。スマートフォンならアプリでもお楽しみいただけます。 <https://www.nhk.or.jp/radio>

放送が終わっても 楽しめる！ 聴き逃し

放送終了後1週間/
聴き逃し対象番組のみ



スマートフォン用アプリはこちらから

伝えるチカラ

NHK 財団

- ◎ 公共メディアNHKを社会へ
- ◎ 社会貢献事業で、次世代の未来を応援！

2023年4月、NHKグループの4つの一般財団法人が合併して、NHK財団が発足しました。子法人の公益財団法人「NHK交響楽団」と共に、事業を進めていきます。

ステラ
net



NHK財団の最新情報ははこちらから

NHK 子ども 音楽クラブ

「NHK子ども音楽クラブ」は、NHKとNHK交響楽団で実施している出前授業。全国各地の学校を訪ねミニコンサートを行っています。

間近で聴く演奏に目を輝かせる子どもたちそして、素顔のN響メンバーに出会えるコンサートです。

出前授業の動画がホームページで
ご覧いただけます



<https://www.nhk.or.jp/event/kodomo-ongaku/>

N響の社会貢献

音楽は人々を元気づけ、ひとときの安らぎを与えてくれます。

N響はコンサートホールを飛び出して、さまざまな場所、さまざまな人たちに美しい音色をお届けし、広く社会に貢献していきます。

子どもたちの未来を育む

「N響が学校にやってきた」をキャッチフレーズにNHKと共催し、楽員たちが全国の小中学校を訪ねてミニコンサートを開く「NHKこども音楽クラブ」、クラシックの名曲を集めて毎年夏休みに開いている子どもと大人がともに楽しめるコンサート「N響ほっとコンサート」、N響の練習所に地元の保育園児を招いて楽器の音色を楽しんでいた「N響といっしょ！音を楽しむ!!」などを開催しています。また、小中学校と協力し、子どもたちが創作と演奏をN響メンバーと一緒に体験するワークショップに取り組むなど、新たな音楽教育プログラムの開発にも力を入れています。

優れた音楽家を育てる

1950年代に「指揮研究員」制度を設置し、有望な若手指揮者をオーケストラの現場に迎え入れ、国内外の巨匠たちとの音楽づくりに携わる機会を提供してきました。この場から故・外山雄三氏、故・岩城宏之氏、故・若杉弘氏、そして現在のN響正指揮者・尾高忠明をはじめ、日本のクラシック音楽界を担う人材を数多く輩出しています。また2003年にはオーケストラ楽員の人材育成を目的に「N響アカデミー」を創設。オーディションで選抜された受講生が、楽員からのレッスン、リハーサルや公演の参加などを通じてトレーニングを積み、修了生はN響をはじめ国内外のオーケストラで活躍しています。

指揮研究員

井出 奏、佐久山修太

N響アカデミー在籍者

ヴァイオリン：下野園ひな子、遠井彩花、中井楓梨

ヴィオラ：和田志織 コントラバス：桑原孝太郎
クラリネット：白井宏典
打楽器：菊池幸太郎(2024年12月1日付)
(2025年1月1日現在)

病院や福祉施設、被災地に届ける

病院や高齢者施設を楽員が訪れてミニコンサートを開き、入院する患者さん、看病するご家族、お年寄りの方たちに安らぎのひとときをお届けしています。また被災地にも出向き、演奏を通じて現地の人たちの応援にも力を入れています。

国際交流の輪を広げる

首都圏の大学と連携して外国人留学生を公演に招待しているほか、演奏指導などを通じてベトナム国立交響楽団との交流を重ねています。音楽は世界の架け橋です。演奏を通じた絆が世界中に広がることを願っています。

大学や専門家と連携する

コロナ禍では業界団体によって行われた演奏中の飛沫を調べる実験に多くの楽員、職員を派遣して協力。この実験を通じ、舞台上の安全な楽器の配置などがわかり、業界の統一したガイドライン作りに役立ちました。2021年からは東京工科大学の授業の一環に協力してN響コンサートのYouTube配信を実現。メディア学部の学生たちが撮影、編集を担当し、NHK出身の職員らの指導を受けてプロ顔負けの作品に仕上げました。N響はこれからも異なる分野の人たちと手をたずさえ、デジタル活用など新しい課題に取り組みます。

役員等・団友

役員等

理事長	中野谷公一
常務理事	三溝敬志 大曾根 聡子
理事	相川直樹 内永ゆか子 岡田知之 杉山博孝 銭谷真美 田辺雅泰 團 宏明 毛利 衛
監事	春原雄策 濱村和則
評議員	稲葉延雄 江頭敬明 樺山絃一 菅原 直 清野 智 田中宏暁 檀 ふみ 坪井節子 中嶋太一 前田昭雄 三浦 惺 山名啓雄 渡邊 修

事務局

演奏制作部	企画プロモーション部	経営管理部	特別主幹	芸術主幹
岩渕一真 高木かおり 高橋 啓 丸山千絵 沖 あかね 上原 静 石井 康 内山弥生 木村英代 利光敬司 徳永匡哉 小倉康平	森下文典 黒川大亮 野村 歩 猪股正幸 三浦七葉子 浅田武志 吉賀亜希 目黒重治 宮崎則匡 山本能寛	吉田麻子 今村啓一 杉山真知子 技術主幹 尾澤 勉	西川彰一	

団友

名譽コンサート マスター

堀 正文

ヴァイオリン

板橋 健
梅澤美保子
海野義雄
大澤 淨
大林修子
大松八路
金田幸男
川上朋子
川上久雄
窪田茂夫
黒柳紀明
公門俊之
齋藤真知亜
酒井敏彦
清水謙二
鈴木弘一
田渕 彰
田中 裕

鶴我裕子
徳永二男
中瀬裕道
永峰高志
根津昭義
堀 伝
堀江 悟
前澤 均
宮里親弘
武藤伸二
村上和邦
山口裕之
蓬田清重
ヴィオラ
大久保淑人
小野富士
梯 孝則
河野昌彦
菅沼準二
店村真積
田渕雅子
中竹英昭
三原征洋
村山 弘
山田雄司
渡部啓三

チェロ
岩井雅音
木越 洋
齋藤鶴吉
三戸正秀
銅銀久弥
丹羽経彦
平野秀清
藤本英雄
茂木新緑
コントラバス
井戸田善之
志賀信雄
佐川裕昭
新納益夫
フルート
菅原 潤
細川順三
宮本明恭
オーボエ
青山聖樹

北島 章
浜 道晃
茂木大輔
クラリネット
磯部周平
加藤明久
横川晴児
ファゴット
岡崎耕治
霧生吉秀
菅原恵子
ホルン
大野良雄
中島大之
樋口哲生
松崎 裕
山田桂三
トランペット
井川明彦
北村源三

来馬 賢
関山幸弘
津堅直弘
栃本浩規
福井 功
堀坂映千生
トロンボーン
伊藤 清
神谷 敏
栗田雅勝
三輪純生
テューバ
多戸幾久三
原田元吉
打楽器
有賀誠門
岡田知之
瀬戸川 正
百瀬和紀

ピアノ
本荘玲子
理事長
曾我 健
田畑和宏
野島直樹
日向英実
木田幸紀
森 茂雄
今井 環
根本佳則
役員
加納民夫
唐木田信也
齊藤 滋
関川精二
鳴嶋郁夫
原 武
山崎大樹
事務局
稲川 洋

入江哲之
金沢 孝
小林文行
清水永一郎
関 照枝
中馬 実
出口修平
西村集介
芳賀由明
松崎ユリ
望戸一男
諸岡 淳
吉田博志
渡辺 克
渡辺克己

フィルハーモニー2025年1月号 | 第97巻 第1号
2025年1月1日発行 ISSN 1344-5693

公益財団法人NHK交響楽団

〒108-0074 東京都港区高輪2-16-49
TEL: (03) 5793-8111 / FAX: (03) 3443-0278
発行人◎三溝敬志 / 編集人◎猪股正幸

企画・編集: (一) 助NHK財団
取材・編集: (株)アルテス・パブリッシング
表紙・本文デザイン: 寺井恵司

印刷: 佐川印刷株式会社
◎無断転載・複製を禁ず

東京春祭

Spring Festival in Tokyo

指揮: マレク・ヤノフスキ

アムフォルタス: クリスティアン・ゲルハーヘル

テイトウレル: 水島正樹

グルネマンツ: タレク・ナズミ

パルジファル: ステュアート・スケルトン

クリングゾル: シム・インスン

クンドリ: ターニャ・アリアーネ・バウムガルトナー

聖杯騎士: 大槻孝志、杉浦隆大

小姓: 秋本悠希、金子美香、土崎 譲、谷口耕平

クリングゾルの魔法の乙女たち:

相原里美、今野沙知恵、杉山由紀、

佐々木麻子、松田万美江、鳥谷尚子

アルトの声: 金子美香

管弦楽: NHK交響楽団

合唱: 東京オペラシンガーズ

合唱指揮: エベルハルト・フリードリヒ

西口彰浩

音楽コーチ: トーマス・ラウスマン



Marek Janowski@Felix Broede

東京春祭ワグナー・シリーズ vol.16

パルジファル

(演奏会形式)

全3幕 / ドイツ語上演・日本語字幕付 上演時間: 約5時間(休憩含む)

2025 **3.27** [木] 15:00 **3.30** [日] 15:00 **東京文化会館 大ホール**
S ¥27,000 A ¥22,500 B ¥18,500 C ¥15,000 D ¥12,000 E ¥9,000 U-25 ¥3,000

こちららも必聴! 東京春祭で聴く、もう一つの「ヤノフスキ×N響」

東京春祭 合唱の芸術シリーズ vol.12

ベートーヴェン《ミサ・ソレムニス》 **4.4** [金] 19:00

東京文化会館 大ホール **4.6** [日] 15:00

S ¥17,500 A ¥15,000 B ¥13,000 C ¥11,000 D ¥9,000 E ¥7,000 U-25 ¥3,000

指揮: マレク・ヤノフスキ
ソプラノ: アドリアナ・ゴンサレス
メゾソプラノ: ターニャ・アリアーネ・バウムガルトナー
テノール: ステュアート・スケルトン
バス: タレク・ナズミ
管弦楽: NHK交響楽団
合唱: 東京オペラシンガーズ

チケットの申込み

東京・春・音楽祭オンライン・チケットサービス

www.tokyo-harusai.com

(座席選択可・登録無料)

※U-25は2月14日[金]12:00発売(音楽祭公式サイト限定取扱)



チケットぴあ <https://w.pia.jp/t/harusai/>

東京文化会館チケットサービス 03-5685-0650

WEBチケットN響 <https://nhkso.pia.jp/>

N響ガイド 0570-02-9502

公演に関するお問合せ 東京・春・音楽祭サポートデスク

050-3496-0202 (月・水・金 10:00-15:00) ※音楽祭開催期間中は土・日・祝日を含め10:00-19:00

主催:東京・春・音楽祭実行委員会 共催:NHK交響楽団 後援:日本ワグナー協会(パルジファル公演) 助成:公益社団法人企業メセナ協議会 社会創造アーツファンド



北大路魯山人 赤絵金彩 銀彩 湯呑
骨董 古美術誌『目の眼』電子増刊1号 | デジタル読み放題 配信中



骨董 古美術の楽しみをつたえる「目の眼」
menomeonline.com

目 
の眼



特別ゲスト:高橋英樹



司会:田添菜穂子

指揮:広上淳一
ヴァイオリン:三浦文彰*
管弦楽:NHK交響楽団
特別ゲスト:高橋英樹
司会:田添菜穂子

& 名曲コンサート

Taiga Drama & Masterpiece Concert

N
郷音

放送100年

大河ドラマ

2025年3月7日[金]7:00pm
東京オペラシティ コンサートホール

(京王新線初台駅東口 徒歩5分) ※2時間程度の公演です



© Masaki Tomitor

© Yuji Hori

曲目

[第1部:大河ドラマ編]

- 青天を衝け(2021/佐藤直紀)
- 軍師官兵衛(2014/菅野祐禰)
- 麒麟がくる(2020/ジョン・グラム)
- 翔ぶが如く(1990/一柳慧)
- 篤姫(2008/吉俣良)
- 元禄太平記(1975/湯浅譲二)
- 草燃える(1979/湯浅譲二)
- 徳川慶喜(1998/湯浅譲二)
- 真田丸(2016/服部隆之)*
- べらぼう~葛重榮華力夢囃~
(2025/ジョン・グラム)

[第2部:「河」「川」にちなんだ
クラシック名曲選]

ヴァイオリン協奏曲 第1番
イ短調 BWV1041(バハ)*

組曲「水の上の音楽」から
第1、3、4、6曲
(ヘンデル/ハーティ編)

ワルツ「美しく青きドナウ」
(ヨハン・シュトラウスII世)

組曲「ミシシッピ」から
「マルディ・グラ」(グロメ)

発売開始日 2025年1月14日[火]10:00am(一般発売)

2025年1月9日[木]10:00am(定期会員先行発売)

料金 全て税込/全席指定

	S席	A席	B席	C席
一般	¥12,000	¥10,000	¥7,000	¥5,000
ユースチケット(29歳以下)	¥6,000	¥5,000	¥3,500	¥2,500

- 定期会員は一般料金から10%割引。
- B席・C席はステージの一部が見えづらい席となります。

前売所

WEBチケットN響 <https://nhkso.pia.jp>

N響ガイド 0570-02-9502

チケットぴあ pia.jp/t/nhkso

e+(イープラス) eplus.jp/nhkso

ローソンチケット l-tike.com/nhkso

主催:NHK/NHK交響楽団

※ユースチケット(29歳以下)はWEBチケットN響およびN響ガイドのみのお取り扱いとなります。
初回ご利用時に年齢確認のための「コース登録」が必要となります。詳細はN響ホームページをご覧ください。
※定期会員割引・先行発売のお取り扱いにはWEBチケットN響およびN響ガイドのみとなります。
※車いす席についてはN響ガイドにお問い合わせください。
※N響ガイドでのお申し込みは、公演日の1営業日前までとなります。
※未就学児のご入場は断断しています。

お問い合わせ: **N響ガイド 0570-02-9502**

営業時間:10:00am~5:00pm(定休日:土・日・祝日)

※東京都内の主催公演開催日は、曜日に問わず10:00am~開演時刻まで営業いたします。
※電話受付の営業となります。

※やむを得ない理由で出演者や曲目等が変更となる場合や、公演が中止となる場合がございます。
公演中止の場合をのぞき、チケット代金の払い戻しはいたしません。
※公演に関する最新情報はN響ホームページでご確認ください。

ひとり进行、みんなのメディアへ。

nhkso.or.jp

放送100年

Follow us on



水素で夢を実現。



2025年大阪・関西万博 水素の船から見える未来

時代はカーボンニュートラルへ。その夢に向け、私たちは切り拓いた。

水素をつくり、はこび、つかう。

その一つ一つのチャレンジが実を結び夢への軌跡を描いていく。

2025年、水素エネルギーが大きく動き出す。

水素でつなごう。人と、世界と、そして、夢を。



船の仕組みや
・ルートは
こちらから



岩谷産業は、
2025年大阪・関西万博を
応援しています。

Iwatani

岩谷産業株式会社